

---

# ハヤテのごとく！短編集～ヒロインは変わる、時のように～つながりを持たない短編集 2

ユーリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハヤテのごとく！短編集～ヒロインは変わる、時のようごとつながらりを持たない短編集2

### 【Zコード】

Z8974D

### 【作者名】

ユーリ

### 【あらすじ】

ハヤテのごとく！の短編集第2弾です。今回はあまり書かない力ツプリング等をやっていこうかと思います。

## 第00話・プロローグ

ええと、コーリでござります。

ハヤテの「ごとく! 短編集もこれで2作目となりました。  
今回の作品では、私があまり書かないカツプリングや友情話等をや  
つていこうかと思います。

今回もだいたい前後編で終わる話がほとんどで、前作と同じく話の  
つながりは全くないです。

予定にあるのは5つから6つの話ですが、書きたいカツプリング等が  
増えれば話も増えるかと思います。

最初の話は桂雪路と薫京之介です。

では、前作と同じくゆるりとお楽しみくださいませ。

## 第01話・桂雪路＆薰京之介編／約20年の想いが叶った日

薰京之介。

白皇学院で体育教師をやつている28歳の独身。

子供の頃からガンプラにハマつており、収入の一部をガンプラ購入に当てている男である。

まあそれも、恋人がいないからなのだが。

しかし実は、幼なじみで現在同僚である桂雪路に昔から好意を抱いているのだ。

だがなかなか言い出せず、10数年もの間告白できずにいたのである。

そして、今彼は・・・

なぜかその雪路と共に飲み屋にいた。

雪路

「で、ナワ は最近どうなのよ?」

京之介

「だからオレはナワ じゃねえつつの。オレがナワ ならオマエ  
はキバ シかよ。」

いつもの会話が続く。

雪路

「アンタの前、橋君のメイドさんとお見合いしてたでしょ？」

京之介

ああ。。。。最後はオーマエが奴隸したけどな

雪路

「アントニーで、ああし」「ダイ」「か好みなの?」

「いや、もうこの手でじやうとうに……」「京之介

昭和二年正月

京之介は、雪路の顔を見て思つた。

今日の彼女は、いつになく真剣な顔だと。

京之介

イヤ……応氣になるヤツはいるんだけど……」

京之介は田をそらしながら語った。

論語卷第十一

「オマエはいるのか？好きな人。」

「オマエはいるのか？好きな人。」

今度は京之介が雪路に聞いた。

雪路

「いるわよ。小さい頃からずっと想つてゐる、ある人がね・・・」

京之介

「え？」

京之介はキヨトンとした。

雪路

「覚えてる？私とアンタがまだ高校生だった頃・・・」

回想・・・

10年前

「薰（あわせ）！オマエ高校生のクセにガンプラやつてんのかよー！」

「くだらねー事やつてんない！」

京之介は、2人の男にからかわれていた。

1人の男が、京之介の机からガンプラを取り上げた。

薰京之介『当時18歳』

「あー返せよー！！」

「へッ！」こんなつまんね～物、こうじて……」

男がガソプラを上に振り上げたその時、1人の少女がそれを引つた  
くつた。

パツ！

「あー、テメエー、之間ー。」

「何すんだよーーー！」

「之間雪路『当時18歳』

「この子が何やうが、アンタらには関係ない事でしょ？こんな大  
人気ない事しないの！」

昔の雪路は、現在のヒナギクのよつて正義感が強かつた。

「へッ！幼なじみだからってかばつてんじやねえのかー？」

「オマエら、キてんじやねえのかー？」

2人の男が雪路をからかうと、雪路は男達をはたいた。

バシバシー！

「イッ、テエーーーーー！」

雪路

「そんな事、アンタらには関係ないでしょーーー？ホラ、お風呂入に行

くわよ京之介……」

京之介

「あ、ああ・・・」

頭を抑える2人を尻目に、雪路と京之介はお面を買いに出かけた。

雪路

「フ、やっぱ飲物はグレープフルーツジュースに決めるわね。」

京之介

「なあ、雪路・・・」

雪路

「何よ?」

京之介

「何でオレの事、いつも助けてくれるんだ?」

雪路

「何でって、そりや・・・アンタが泣き虫だからでしょうが。アンタを守るのは、幼なじみの私の役目・・・そう私は思ってるから・・・」

京之介

「・・・」

雪路の発言に、京之介は赤面した。

やがて、ヒナギクの6歳の誕生日に雪路達の両親は8000万円の借金を彼女に押しつけて姿を消した。

雪路は「一ヒースショップで必死になつて働き、何とか借金を返しきつた。

まあ、多少強引な手段も使つたようだが。

その後、雪路とヒナギクは桂家の養女となつたのだ。

京之介

「そりだつたな、そんな事もあつたつけな・・・」

雪路は少しビールを飲んだ。

京之介

「なあ、雪路。オレの話聞いてくれないか?」

雪路

「良いわよ。話つて何?」

京之介

「オレが、昔からオマエの事好きだつたんだ。でも、オマエはオレよりもカッコイイし、人気もあつたし・・・正直、オレなんかが雪路と釣り合わないと思ってて・・・約20年も片想いを続けてきた

んだ。」「

雪路

「・・・」「

京之介

「情けねえよな、オレ・・・日比野がオレにキモイ話だつて言つて  
も、わかる気がするよ・・・」

京之介の話が終わると、雪路は彼に顔を寄せた。

雪路

「アンタ、そんな事でずっと悩んでたワケ？確かに情けないわね。」「

雪路はセリフをつと、京之介の頬にキスをした。

チユツ！

京之介

「ゆ、雪路ー？何を・・・」「

雪路

「良い？良く聞きなさいー私はね、アンタの器用な所が好きだった  
のよ。でも、恥ずかしいからか中々言い出せなくて・・・20過ぎ  
てもアンタに告白できないイライラを、酒とかにぶつけて晴らして  
きたけど、やっぱもう限界だわ。」「

雪路は言いつぶやくと、頬を赤くさせながら言った。

雪路

「ずっと言えなくて、ゴメン……私、アンタの事が好き。アンタ  
さえ良いなら、私と結婚してくれない？」

雪路が言い終わると、京之介は瞳が潤んだ。

京之介

「良いに決まってるじゃねえか。オレもオマエの事が好きなんだか  
らよ……」

雪路

「フフ……これからもよろしくね、京之介。」

京之介

「じゅうじよろしく、雪路。」

それから1ヶ月後、雪路と京之介は結婚した。

式にはハヤテ達生徒が多数駆けつけ、2人を祝福してくれた。

雪路はもう、イライラを酒等にぶつける事はないだろう。

ずっと想い続けてきた、幼なじみと結ばれたのだから。

桂雪路と薰京之介。

2人の未来に、幸あれ。



「」は白皇学院。

小中高一貫教育の学校で、よほどの事がない限り落第しないレベルの高い学校である。

この学校の時計塔に、桂ヒナギクら生徒会役員達が集まる生徒会室がある。

生徒会長の桂ヒナギクは成績は抜群で男女問わず人気者だが、高所恐怖症という弱点を持つため、ベランダにだけは近づく事ができない。

副会長の霞愛歌は見た目はお淑やかだが、カワイイ人を見つけるとイジメずにはいられないという極S少女であり、いつも弱点帳を持つている。

書記の春風千桜は普段はクールですましているが、ひとたびバイトの日が来れば容姿真逆のカワイいらしいう格好に早変わりする、弾けタツブリのメイドキャラである。

風紀委員の朝風理沙は家が神社で実は巫女さんだが、鷺之宮伊澄のように特にこれといった特殊能力はなく、いつも何を考えているかわからない謎キャラである。

副委員長の花菱美希はヒナギクに良く助けられており、どこまでもヒナギクにカツコ良さを求めたまにヒナギクを困らせる内閣総理大臣経験者の孫娘である。

委員長の瀬川泉はいつもニーハーフ笑っているが、ハヤテに爆弾発言をしてしまった事から一瞬にしてMキャラになってしまった有名電気会社の孫娘である。

そしてこの泉、現在は綾崎ハヤテとつき合っている。

その影響なのか、いつも仕事をサボっている3人組の1人であった泉もマジメに仕事をするようになってしまったのだ。

これには、美希と理沙も困ってしまった。

何しろ、3人でいるからこそヒナギクにバレた時でも手分けして逃げられるのだ。

だが、泉がヒナギク側に移ってしまった今、いくら2人で逃げようとも泉経由ですぐヒナギク達に居場所がバレてしまう。

そのため、理沙と美希は困っていたのである。

理沙

「なあ、泉・・・本当に逃がしてくれないのか?」

理沙は泣きそうな顔になりながら、泉に聞いた。

泉

「ダメだよ?理沙ちん達を逃がしたら、ヒナちゃんとハヤテ君に怒られちゃうもん!」

泉は強氣で言つた。

美希

「どうやら泉、ハヤ太君とつき合つてゐるのを本當のようね？」

理沙

「それにハヤ太君はヒナに頭が上がらないからな。悪く言へば貰取  
か？」

泉

「失礼な！とにかく、2人を逃がすワケにはいかないよ！あーちゃん  
ん、ちーちゃん！」

泉が叫ぶと、春風千桜と露愛歌が現れた。

あーちゃんといつのは、愛歌のニックネームである（千桜のニック  
ネームが『ちーちゃん』であるため）。

理沙

「春風ちゃんはともかく、露ちゃんはわざとキツいな・・・」

美希

「ええ。弱点帳に書かれたら最後だからね。」

愛歌

「わかつてゐなら、おとなしくした方が良いのでは？」

美希

「ぐう・・・」

美希と理沙は、おとなしく従つた。

その夕方、美希と理沙は2人で帰つていた。

理沙

「クソ、悔しいな・・・」

美希

「何とか、泉をギャフンと言わせる方法はないものかしらね・・・」

理沙

「そうだな・・・そうだーこの作戦はどうだ?」

理沙は美希に耳打ちした。

美希

「それ、良いわね!」

美希は笑顔になつた。

美希と理沙は、泉を出し抜くためにある作戦を考えた。

しかしこの時、2人を監視していた人物がいた事に彼女達は気づいていなかつた・・・

翌日 放課後

泉は昨日と同じく、美希と理沙に話しかけた。

泉

「美希ちゃん、理沙ちゃん！ 今日もまた仕事手伝つてもいいよ！」

美希

「ええ、もちろん手伝うわ。その前に、トイレに行きたいんだけどいいかしら？」

理沙

「あ、私も。」

泉

「？ 別に良いよ？」

泉はアッサリ許可した。

美希

「じゃあ、トイレ行つたら戻つて来るから。」

泉

「ちゃんと戻つて来てよ？」

泉が言うと、2人は『うん』と返事した。

美希と理沙は教室を出ると、足早に走り出した。

美希

「アツハツハ、うまくいったわね理沙～！」

理沙

「全くだな美希～まさかあんなに簡単にだまされるなんてな～！」

美希と理沙は、笑いながら道を歩いている。

そう、2人は戻る気など最初からなかつた。

最初からサボるつもりだつたのだ。

理沙

「さて、今からどこで時間つぶす？」

美希

「そうねえ・・・」

美希と理沙は、相談をしながら歩いていた。

そのせいなのか、彼女達は後ろから来ている影に気づかなかつた。

「（おい、やるべ。）」

「（はい、兄貴。）」

2つの影は顎を合つ。

そして、行動を起こした。

ます右側の男が、美希の口をハンカチで塞いだ。

ガバッ！

美希

「んぐつ！！」

理沙

「！？」

美希のうめき声に、理沙は彼女の方を向いた。

理沙

「ど、どうした美希！？」

そう叫ぶ理沙も、ほどなく口を塞がれた。

ガバッ！

理沙

「むぐつ！？」

2人は必死にもがいたが、やがて目がトロンとなつていった。

美希・理沙

「うう・・・」

美希と理沙は気を失った。

2人と襲つた2人組はニヤリとすると、彼女達を近くに止めてあつた車の後部座席に押し込んだ。

そしてそのまま、何事もなかつたように走り出した。

その様子を、ある少女が目撃していた・・・

その後も泉は美希と理沙が戻つて来るのを待つていたが、一向に2人は戻つて来ない。

泉

「どうなつてゐるの・・・?全然戻つて来ないじやない!2人共!-!-」

泉はいつもの笑顔ではなく、とても怒つていた。

愛歌

「やられましたね。まさか、トイレを口實に逃げられるとは・・・」

千桜

「どこの中学生ですか、あの2人は・・・」

泉を呼びに来た愛歌と千桜も、ため息をついている。

ハヤテ

「で、どうします泉さん？」

ハヤテが泉に聞いた。

泉

「そんなの決まってるよ！あーちゃん、ちーちゃん、ハヤテ君！今から4人で手分けして美希ちゃんと理沙ちゃんを・・・」

泉がそこまで言つた時、急に教室のドアが開いた。

入つて来た人物に、ハヤテは見覚えがあつた。

ハヤテ

「あなたはシスター！」

そう、ハヤテが以前執事とらのあなたでお世話になつたシスター、ソニアである。

ハヤテ

「どうしたんです？白皇に来て。」

ソニア

「た、大変ですハヤテ君！水色の髪の女の子と黒髪の女の子が、怪しい2人組にさらわれたんです！…」

ハヤテ

「ええっ！…」

ハヤテは驚いた。

千桜

「水髪と黒髪の女の子って・・・」

愛歌

「ま、まさか・・・」

泉

「美希ちゃんと理沙ちゃん！？」

泉達も、顔が真っ青になった。

その頃、理沙は薄暗い部屋で目を覚ました。

理沙

「う・・・ここはどこだ？」

理沙は立ち上がりようとしたが、なぜか体が動かない。

仕方がないので辺りを見回すと、理沙の後ろに美希の顔が見えた。

スヤスヤと寝ている。

理沙

「おー、美希！起きるーー！」

理沙が叫ぶと、美希が田を覚ました。

美希

「ん・・・理沙？」

理沙

「良かつた、気がついたか。」

美希

「理沙、私達一体どうなったの？頭はクラクラするし、体は金縛りにあつたみたいに動かないし・・・」

理沙

「それは・・・」

理沙が答えようとした時、部屋が明るくなつた。

誰かが電気を点けたのだろう。

「田が覚めたようだな、お嬢ちゃん達。」

美希と理沙が声のした方を見ると、怪しげな2人組が立っていた。

「ここでよひやく、美希と理沙は自分達の手足と体がロープで縛られている事に気づいた。

理沙

「金縛りみたいに動けない原因はこれだったのか・・・」

美希

「私達を誘拐してどうするつもりなの？」

美希が2人組をにらみながら言った。

「お嬢ちゃん達の親から金をいただく。」

要するに、身代金目的の誘拐だ。

美希

「あなた達、見覚えがあると思ったら、以前三千院ナギちゃんを誘拐しようとしたヤツらね？私のメモ帳に載っているわ。」

理沙

「呆れたヤツらだ。性懲りもなくまたこんな事をしようとするとはな。」

「どうとでも言え。オレ達には金が必要なんだよ。」

「とにかく、じぱりく黙つていってもいいだ。」

男はそう言つと、ガムテープを取り出した。

テープをビリッと切ると、理沙の口に貼つた。

ペタッ。

理沙

「ん~……」

美希

「理沙！！」

「オマエには話せせる事がある。携帯の場所を教えてもらおう。」

美希

「わ、わかったわ・・・」

美希はおとなしく携帯の場所を教えた。

泉達は教室で、深刻な雰囲気になつていた。

ハヤテ

「朝風さん達が誘拐されたなんて・・・」

泉

「どうしよう、ヒナちゃん？」

ヒナギク

「落ち着いて！きっと犯人から電話がかかつてくるハズよ！」

愛歌

「電話してきた時が勝負ですよ、泉さん。」

泉

「うん！」

泉が元気良べ返事すると同時に、泉の携帯電話が鳴った。

「ピココ、ピコリ……

泉

「ヒヤアー電話？」

電話の主は、美希だった。

泉

「美希ちゃんから電話だー！」

ハヤテ

「泉さん、できるだけ会話を引き延ばしてください。」

泉

「わかった。」

泉は恐る恐る電話を押した。

泉

「もしもし？」

「オマエが瀬川泉か？」

泉

「はい、そうです。あなたが誘拐犯ですか？」

「フフフ、そうだ。」

泉

「田的は身代金ですか？」

「話が早いな。そつだ。2人を助けたければ、4500万円用意しろ。」

泉

「わかりました。それより、美希ちゃん達は無事ですか？」

「ああ、無事だ。黒髪の子は口を塞いでいるがね。」

泉

「美希ちゃんの声を聞かせてください…」

「良いだろ？。」

男は美希の顔に携帯を近づけた。

美希

「い、泉…」

泉

「美希ちゃん、無事？」

美希

「ええ、何とか無事よ。『メンね、泉。仕事サボっちゃって…』

泉

「そんな事今はどうでも良じよー。」

泉は強気で言った。

「お嬢ちゃん、君が身代金を持って来い。」

泉

「え？」

泉はキヨトンとした。

「君が持つて来るんだ。そうすれば、2人は解放しそう。」

泉はしばらく考え込んだが、ほどなく答えた。

泉

「わかりました。私、行きます。」

ヒナギク・千桜・愛歌・ハヤテ・ソニア

「なー?」

泉の返事を聞いたハヤテ達は、驚いた。

美希

「ダ、ダメよ泉!」これはあなたを誘い寄せる罠よ! 来たりゃダメホー! !」

「つるせー!」

男は叫ぶ美希の口を手で塞いだ。

美希

卷之二

泉

— 美希ちやん！？

「持つて行く場所は後で言う。いいか、警察には知らせるなよ！」

男はそう言つと、電話を切つた。

泉

「つたく、つるむといお嬢ちゃんだ。」

男はそう言つと、美希の口にもガムテープを貼つた。

ペタッ！

「ん～！！」

電話が切れるとなれば、泉達は再び深刻な顔になつた。

ヒナギク

「犯人は、泉を名指しで指名してきた・・・」

愛歌

「泉さんがソニーの孫娘だと知っているって事ですね・・・」

千桜

「泉さん、どうするんです?これは罷かもしません。」

泉

「たとえ罷だとしても、私が行かなきゃ美希ちゃん達は助けられない!行くしかないよ!..!」

泉の瞳は真剣だ。

ハヤテ

「そうですね・・・泉さん、くれぐれも気をつけてくださいね。」

ハヤテは泉の手を握った。

泉

「大丈夫だよハヤテ君。心配しないで」

泉はそう言つと、真剣な顔つきになつた。

泉

「待つてて!美希ちゃん、理沙ちゃん!私が必ず助けてあげるからね!..!」

泉は美希と理沙の救出を強く決意した。

第03話・生徒会3人娘編／女子高生探偵・瀬川泉の事件簿『後編』

翌日、ハヤテ達は瀬川邸に集まっていた。

要求された身代金4500万円も、トランクに詰めている。

泉

「それじゃあ、今から行つて来るね。」

ヒナギク

「泉、くれぐれもムチャはしないでね？」

千桜

「必ず理沙さん達を助けてくださいね。」

愛歌

「任せましたよ。」

ヒナギク・千桜・愛歌が口々に言つ。

泉

「大丈夫だよ、心配しないで。」

泉は笑顔で言つた。

ハヤテ

「泉さん。」

泉

「 なあに？ハヤテ君。 」

ハヤテ

「 虎鉄さんが、これを持って行けと言つてました。 」

ハヤテは泉に細長い袋を渡した。

泉

「 ( これは、確か瀬川家に代々伝わる・・・ ) ありがとハヤテ君。  
とても心強いよ 」

そいつ言つと、泉は出かけて行つた。

パタン！

千桜

「 行きましたね。 」

愛歌

「 大丈夫でしようか・・・ 」

ハヤテ

「 大丈夫ですよ。ソニアさんが泉さんの後を追つてくれますから。 」

ソニア

「 後を追つて、どうやつてですか？ 」

ハヤテ

「 泉さんの首の後ろに発信機をつけておいたんです。本人にも了承を得てますし、これは泉さんの身が危なくなつた時の保険ですから。 」

「

ソニア

「そうですか。わかりました、では今から行つて来ます。」

ハヤテ

「お気をつけて。」

ソニアは頷くと、出かけて行つた。

泉は今、練馬区内を走つていた。

タタタ・・・

泉

「早く美希ちゃん達を助けなきや・・・待てよ? 私ど二に行けば良いんだつけ?」

泉が戸惑つていると、携帯が鳴つた。

ピココ、ピココ!

泉

「はい、もしもし?」

「瀬川泉か? オレだ、誘拐犯だ。」

誘拐犯からの電話である。

「行き先を言い忘れていた。南練馬区の廃墟になつた倉庫に身代金を持つて来い。」

泉

「わかりました。」

「ところで、サツには知らせてないだろ？」「

泉

「大丈夫です、誰にも知らせてません。」

「それで良い。速く来いよ。」

「そう言つと、男は電話を切つた。」

ピッ！

泉

「待つててね！美希ちゃん、理沙ちゃん！－！」

泉はそう言つと、速度を上げた。

ドギヤ－！

その頃・・・

南練馬区 廃墟倉庫

美希と理沙は、廃墟となつた倉庫の中に監禁されていた。

2人は体を背中合わせにされ、ロープでグルグル巻きに縛られていた。

美希・理沙

「ん~、ん~・・・ん~、ん~・・・」

2人がもがいていると、向こうの部屋にいた2人組が戻つて來た。

ガチャ！

美希・理沙

「！」

「お嬢ちゃん達、おとなしくしてたか？」

美希・理沙

「ん、んんん・・・」

美希と理沙は小さく頷く。

「どれ、少し話せるようにしてやるか。」

そう言つと、サングラスをかけた方の男が美希と理沙に近寄り、

人の口に貼つてあるガムテープをはがした。

ピリリー！

美希・理沙

「イ、イタタ……」

口が自由になつた美希と理沙は、2人組を睨みつけた。

理沙

「1つ聞いて良いか？」

美希

「どうしてまた誘拐なんてくだらない事考えたの？」

「そんなの簡単だ。ですよねアニキ？」

「ああ、オレ達は楽して儲けるのが好きなんだよ。」

美希

「2度も失敗してまだ懲りてないなんて……」

理沙

「成長のないヤツらだな……」

「何とでも言いな。弟、コイツらの口を塞げ。」

「わかりました、アニキ。」

サングラスの男はガムテープをビッと切ると、美希と理沙に近づい

て来た。

美希・理沙

「ちょっと、ちょっと待つ……ん~つ……」

『待つて……』と顔おうとした美希と理沙だが、口にガムテープを貼られてしまった。

美希・理沙

「ん~、ん~……」

「全く、口うるさいお嬢ちゃん達だな。」

「ですね、アーキ。でも今回は仲間がいますからね。」

「やつだな。瀬川泉が手に入るのも時間の問題だ……」

2人組は高笑いする。

理沙

「ん、んんんう~……(い、泉い~……)」

美希

「ん、んんんんう~……(た、助けてえ~……)」

美希と理沙は、俯いていた。

同じ頃、泉は南練馬区倉庫にたどり着いた。

泉

「やつと着いた・・・」に美希ちゃんと理沙ちゃんが・・・」

泉はトランクを持つ手を強く握った。

ギュウ！

泉

「今行くよ、美希ちゃん理沙ちゃん！..」

泉は決心し、扉を叩いた。

ノンノン！

泉

「瀬川泉です！持つて来ました！..」

泉が叫ぶと、扉が静かに開いた。

ギギギギギ・・・

泉は中に入る。

「持つて来たか、瀬川泉。」

泉

「はい。美希ちゃんと理沙ちゃんはどこですか？」

「あそこだ。」

一ツト帽の男は向こうの方を指差した。

泉

「美希ちゃん！理沙ちゃん！！」

泉が叫ぶと、美希と理沙は彼女の方を見た。

美希・理沙

「ん、んんんう・・・（い、泉い・・・）」

泉

「身代金は持つてきました。美希ちゃんと理沙ちゃんを解放してください！」

泉は叫んだが、2人組は突然笑い出した。

「ハハハハハハハハハ！」

泉

「え？」

泉はキヨトンとする。

「悪いが、そういうワケにはいかねえんだ。」

2人組がそう言つと、扉が開いて数人の男達が入つて來た。

泉

「な、何！？この人達は！？」

「オレ達が脱獄する時協力して一緒に脱走した面々さ。」

泉

「アーティスト一覧」

泉がそう語ると、どじからか声が聞こえてきた。

「やつぱつやうこう事だつたんですね・・・」

「だ、誰だ！？」

2人組が声のした方を見ると、上の階にソニアが立っていた。

泉

「ソニアちゃん……」

ソニアは上の階から飛び降り、泉の側に着地する。

トン！

ソニア

「泉さん、これはワナですよ。あなたを誘き出すためのね。」

泉

「ワナ？」

ソニア

「彼らは美希さんと理沙さんをオトリにして、泉さんをも捕らえる気だつたんです。ソーアの孫娘であるあなたを人質にするためにね。」

泉

「私を・・・」

「フツ、そこまでわかつてるんなら尚更帰すワケにはいかねえな。」

「オマエら、女2人を引っ捕らえる!...」

2人組の声で、男達が泉とソニアに近寄り始めた。

ジリジリ・・・

ソニア

「泉さんは私の影に隠れて!..絶対に私から離れないでください!..」

泉

「う、うん・・・」

泉はソニアの影に隠れる。

ソニアは服からトントンファーレを2つ取り出した。

ジャキッ!!

ソニア

「あなた達の相手は私です!かかつて来なさい!..」

「ナメんなこのガキイ！！」

男達はソニアに突っ込んで来た。

ダッ！

ソニア

「やあっ！…」

ソニアは泉を影に隠しながら、トンファーで男達を強打した。

ドガア…！

ズガン…！

「クソオ、この女強いぞ…！」

ソニア

「当たり前です。私はシスターなんですから。」

ソニアはトンファーを構え、男達を威嚇している。

だが、彼女は背後から近づく男に気づかなかった。

そして、ソニアの影に隠れていた泉が突然うずくまつた。

泉

「う…」

ソニア

「どうしたんですか泉さん！？」

泉

「ちょっと両手に切り傷が・・・」

ソニア

「クッ！後ろに仲間がいた！？」

「ククク・・・前や横ばかり守っていてもダメって事さ。」

ソニアは泉を片手でかばいながら、回りを見渡し始めた。

「シスターといつても所詮小娘だ。1人だけでその娘を守りきるのは不可能って事なんだよ。」

ソニア

「クッ・・・」

ソニアは泉をかばいながら男達の相手をしていたが、少しずつ彼女は疲れ始めた。

ソニア

「ハアハア・・・」

泉

「だ、大丈夫ソニアちゃん！？」

ソニア

「え、ええ・・・まだ、大丈夫です・・・」

ソニアはそう言つたが、彼女の足がふらつき始めた。

そして、遂にソニアは倒れ込んでしまつた。

ドサッ！

泉

「ソ、ソニアちゃん！..」

ソニア

「う・・・わざ足を少し切りつけられたみたいです・・・」

泉

「ソニアちゃん、大丈夫・・・」

泉はソニアを起しやうとしたが、サングラスの男に鉄の棒で殴り飛ばされた。

ドカッ！！

泉

「キャア！..」

泉は倉庫の壁に叩きつけられた。

泉は氣絶した。

泉  
「う・・・」

美希・理沙

「んんん～っ……（泉～っ……）」

ソニア

「泉さん…！」

男達に押さえつけられたソニアが、必死に叫んだ。

「オマエ達、このシスター娘を縛り上げろ…」

二ツト帽の男が叫ぶと、男達が縄でソニアを縛り始めた。

ソニア

「う、ぐう…」

ソニアは男達によつて手足を縄で縛り上げられた。

サングラスの男は泉に近づいて行く。

ソニア

「い、泉さん！起きてください…！」

ソニアが叫んだ。

「つむせえ…！」

男達の1人がもがくソニアの口にガムテープを貼つた。

ソニア

「ん～ん～！～！」

サングラスの男とニット帽の男が泉に近づき、縄とガムテープを取り出した。

「これで、瀬川泉は頂いたも同然だ・・・」

2人組は、勝ち誇った顔をしている。

そして泉の手を縛ろうとした、その時だつた。

彼女の背中から、モノスゴイオーラが発動したのは。

次の瞬間、泉から放たれたオーラは2人組を吹っ飛ばした。

パン！！

「グオア！～」

2人組は壁に叩きつけられる。

「何なんだ、今のオーラは！？」

「フン、所詮見かけ倒しだ！」

「そうだ、数でかかれば怖くねえ！」

「やつちまえーつー！」

ソニアを押さえつけていた男達が、泉の方へと走り出した。

ダツ！

それと同時に、泉もゅうくじと立ち上がる。

スウウウウウ・・・

ソニア・理沙

「…（こ）これは…・・・！？」

シスターであるソニアや巫女である理沙にはわかる。

泉の体から、ただならぬオーラが感じられる事を。

泉は背中に背負っている袋から何かを取り出した。

スラツ！

ソニア

「（ま、まさかあれは…・・・）」

それは木刀だった。

そして、泉はそれを構え念を込め始める。

「オオオオオ…・・・

泉

「ハアアアアアアツ…・・・

男達が泉に飛びかかった、その時である。

泉は木刀を振り、男達を一気に吹っ飛ばした。

バシイ！！

「グアツ！！」

「ガハア！！」

ソニア・理沙・美希

「！！」

男達が次々と地面に落ちる。

それと同時に、2人組が目を覚ました。

「ク・・・ア、アニキ！仲間が全滅してますーー！」

「何だとおおおおーー？」

泉

「安心して、峰打ちだから。」

泉は冷ややかに言つ。

「チクショーッ！！」

2人組もナイフと拳銃を取り出し泉に襲いかかる。

泉

「私の友達をキズつけようとした事、後悔させてあげる！瀬川流剣術、潮騒の波動斬り！！」

泉は木刀を一振りし、ナイフと拳銃を叩き斬った。

ザンッ！！

「えつ！？」

「ウソ・・・」

2人組が持っていた拳銃とナイフは、真っ2つになった。

泉は慌てる2人に木刀を突きつける。

ジャキッ！！

「ヒ、ヒイッ！？」

泉

「自首・・・してくれるかな？」

「は・・・はい・・・」

2人組はヘタヘタと地面にへたり込んだ。

その後泉が電話で呼んだ警察が駆けつけ、2人組と仲間達は連行されて行つた。

泉達4人は、瀬川邸に帰つて來た。

ハヤテ達が4人を出迎える。

ヒナギク

「泉！」

千桜

「理沙さん、美希さん！」

愛歌

「無事だつたんですね！」

ヒナギク・千桜・愛歌が泉・美希・理沙を囮んだ。

ソニア

「泉さんのおかげなんですよ。彼女の持つ木刀がなかつたら、私達も危うく捕まるところでしたから。」

ハヤテ

「そうだつたんですか。」

ソニア

「ところで、泉さん？その木刀つてやつぱり・・・」

泉

「うん、ヒナちゃんが持つてる正宗と対をなす木刀・村正っていうんだよ。瀬川家に代々伝わる家宝なの。」

ヒナギク

「それはスゴいわね。一度手合わせしてみたいわ。」

泉

「うーん、また今度ねー。」

ハヤテ達は皆、微笑んでいた。

翌日 白皇学院

理沙と美希は、相変わらず生徒会の仕事をサボりつとしていた。

理沙

「よし、誰もいないぞ美希ー！」

美希

「今之内に逃げましょー！」

そう言って走り出そうとする2人。

だが・・・

泉

「どこのへ行くのかなあ～・・・美希ちゃん？理沙ちゃん？」

いきなり2人の後ろに泉が現れた。

右手には木刀・村正を持っている。

理沙

「うわあああああー！」

美希

「泉いいいいー！？」

千桜

「私達もこまますよ。」

美希と理沙を、ハヤテ達が取り囲んでいた。

ソニアもいる。

理沙

「な、何でソニアさんがここにーー？」

ソニア

「昨日づけで白皇学院に転校して來たんですよ」

美希

「そ、そつなの・・・」

愛歌

「それよりも、この状況は多勢に無勢ですわね？」

美希

「うう・・・」

理沙

「お、お願ひだ泉！今日は見逃してくれーー！」

泉

「ダメだよー また一昨日みたいに危ない目に遭いたくないでしょ  
う？」

理沙・美希

「そ、それはそうだけど・・・」

泉

「じゃ、決まりだね。」

愛歌

「諦めた方がよろしいですわよ、お2人さん

理沙・美希

「そ、そんなあーーー！」

ハヤテ

「じゃあ、生徒会室に行きましょーか。朝風さん、花菱さん？」

ソニア

「これも神のお導き・・・」

美希・理沙

「イヤだあああああ！」

美希と理沙は、哀れにも泉達に引きずられて行つた。

その後ヒナギクは泉に木刀での勝負を挑んだが、一度も彼女に勝つ事ができなかつたという・・・

生徒会にはそれから、会計としてソニアが入り前より賑やかになりましたとさ

生徒会3人娘編・完

## 第04話・靈愛歌編～副会長と執事の恋物語『前編』（前書き）

このお話は、『ハヤテの』とく短編集～ヒロインは変わる、時のようにつながらりを持たない短編集に収録されている『靈愛歌編～臨時生徒会長と副会長さん』の続編に当たる小説です。

愛歌の性格がかなりちがつと感じますが、楽しんでくれたら幸いと 思います。

後、少し注意事項があります。

この小説において、原作にある設定は一切ございません。 つまり、『ハヤテがアテネの事をまだ引きずっている』という設定 がないという事です。

以前投稿した短編小説への評価において、ハヤテが原作で『女の子とつき合つ甲斐性がない』と言つていた事を前提とし、『前の彼女である天王州アテネの事をまだ引きずっている』事を理由に論理的に考えて制作しろという評価が来たので、その方への返事と注意も 兼ねてこのような事を書かせていただきました。

そのような評価をする方には、今後読んでもらう必要はありません。 この注意事項を了承していただける方のみ、本編へとお進みください。

「……何？靈愛歌嬢の拉致に失敗しただと？」

「はい……実行した男が後1歩のところで逮捕されてしまいまして……」

「フン、阻止したヤツは例の少年か？」

「はい、三千院家の執事です。」

「そうか。まあ良い。標的の家は突き止めてあるのだらうな？」

「はい。もう既に突き止めてあります。」

「良いか、あの男に伝えよ。今度こそ靈愛歌嬢を拉致するのだ、と。我ら組織のためにな。」

「ハツ。」

「そう言つと、男は歩いて行つた。

「フフフ、三千院帝め……今に見ておれ……田にもの見せてく  
れるわ……」

首謀者らしき老人は、不敵に笑つていた……

数日休みを経て、霞愛歌は再び白皇へ登校して来た。

ただ、今までどうしちがうのは・・・

愛歌

「千桜さんゴメンナサイね、側についてもらって。」

千桜

「いえ、私も愛歌さんの事が心配ですか？」

そう、春風千桜が愛歌のボディーガードをしている事である。

なぜ千桜が愛歌のボディーガードをしているかといつと・・・

実は愛歌、1週間前に誘拐されたのだ。

犯人はハヤテの活躍により逮捕されたが、またいつ愛歌が狙われるかわからない。

そのため、生徒会のメンバーの1人が愛歌のボディーガードをする事になったのである。

ちなみに千桜が選ばれたのは、愛歌の強い希望があったからだ。

千桜

「愛歌さん、安心してください。私や会長達が全力であなたをお守りしますから。」

愛歌

「ウフフ、頼もしいですわ。」

愛歌は微笑んだ。

千桜

「あつ、ハヤテ君が。」

愛歌

「えつ！？」

千桜の声に、愛歌は辺りを見回した。

確かに愛歌の田線の先にハヤテの姿が見えた。

ナギは今日もいないうつだ。

ハヤテ

「あ、おはよハヤテさんです愛歌さん。千桜さんも。」

愛歌

「お、おはよハヤテさんですハヤテ君・・・」

愛歌は珍しくオロオロしてくる。

千桜

「おはよハヤテさんです、ハヤテ君。」

ハヤテ

「愛歌さん、具合の方はいかがですか？」

愛歌

「え、ええ・・・だいぶ良くなりましたわ・・・」

ハヤテ

「それは良かつたです」

愛歌

「あう・・・」

ハヤテの笑顔に、愛歌は赤面した。

千桜

「（フーン・・・もしかして愛歌さんは・・・）

千桜はニヤニヤしながら、何かを考えていた。

授業が終わり、昼休みになった。

ハヤテ

「フウ・・・お昼の準備でもしましょ、・・・」

ハヤテは教科書を片づけている。

千桜

「ハヤテくん。」

千桜がハヤテの席に近づいて來た。

ハヤテ

「あ、千桜さん。」

千桜

「ハヤテ君、今田も三千院さきにないんぢょう?..」

ハヤテ

「ええ、まあ。」

千桜

「じゃあ、私達生徒会役員とお皿(いん)一緒にしませんか?..」

ハヤテ

「ええ、かまいませんよ?..」

ハヤテは千桜の提案に応じる。

愛歌

「(ハ、ハヤテ君が私達と一緒にお皿を・・・?)」

愛歌はドキドキしていた。

ハヤテ達は、食堂で昼食を取っていた。

愛歌はさりげなく、ハヤテの隣の席に座っている。

もちろん、周りからの視線がキツいのは言ひまでもない。

ハヤテ

「久しぶりです、大勢で食事するのは。」

泉

「なんだ？」

理沙

「ハヤ太君は幼い頃、同級生達と食事した事はないのか？」

ハヤテ

「ええ・・・両親があんなのでしたから、一緒に食べる同級生なんていませんでしたよ・・・」

ヒナギク・泉・美希・理沙・千桜・愛歌

「・・・」

ハヤテとヒナギク達の間に沈黙が流れる。

理沙

「（マズイ・・・何か不穏な空気になつてゐる・・・）

ヒナギク

「（理沙がハヤテ君の気に触るような事言つたからじゃない――）

泉

「（誰か話題を変えてくれないかな・・・？）」

ヒナギク達の顔に冷や汗が流れる。

美希

「そ、そういうえばハヤ太君、昨日のテレビを見た？」

ハヤテ

「すいません、あいにく勉強で忙しかったもので。何か気になるニュースでもあつたんですか？」

美希

「こないだ愛歌さんを誘拐しようとしてあなたに倒され、逮捕された男がいたでしょ？」

ハヤテ

「ええ。ものの数秒で倒したので名前までは知りませんが・・・その男が何か？」

美希

「驚かないで聞いてね。その男、何と脱獄したらしいのよーー。」

ハヤテ

「な、何ですってー？」

美希

「これがその一ニュースよ。録画したのをビデオカメラで撮ったの。」

美希はビデオカメラを起動した。

ハヤテ達はビデオカメラをのぞき込む。

『先日夕方、白皇学院生徒である霞愛歌さんを誘拐しようとして逮捕された男・鵜飼秀ウカイヒデ教容疑者が、一昨日の深夜に刑務所から脱獄しました。調べによると鵜飼容疑者は脱獄が難しい独房に収容されており、警察では何者かの手引きもしくは関与があつたものと見て、捜査を進めています・・・』

ヒナギク

「何て事なの、まさか脱獄したなんて・・・」

ヒナギクが紅茶をすすりながら言つ。

愛歌

「私、怖いですわ・・・また狙われたりしたらどうしましよう・・・」

「

愛歌は少し震えている。

ハヤテ

「大丈夫ですよ愛歌さんー。ボクやヒナギクさん達が必ずお守りしますから。」

愛歌

「え、ええ・・・」

愛歌は少し頬を染める。

千桜

「フフフ・・・」

千桜はそれを見た。「いやいやしていた。

ヒナギク・泉・美希・理沙

「？」

ヒナギク達には、千桜がニヤついている意味がわからなかつた。

授業も全て終わり、放課後になる。

ハヤテ達6人は、愛歌をガードしながら下校していた。

やがて、1回目の十字路に差し掛かる。

美希

「じゃあ、私達じつちだから。」

泉

「ハヤ太君、アーチャン、チーチャン、ヒナちゃんーまた今度ねー！」

泉・美希・理沙の3人がハヤテ達と別れた。

ハヤテ達はまたしばらく歩く。

すると、2回目の十字路に差し掛かった。

ヒナギク

「じゃあ、私もひつひつだから。また今度学校でね。」

そう言つと、ヒナギクは帰つて行つた。

ハヤテ

「さて、後は愛歌さんを靈邸に送り届けるだけですね。」

愛歌

「2人共、よろしくお願ひしますわ。」

千桜

「では、行きましょうか。」

その後、ハヤテと千桜は愛歌を無事靈邸に送り届けた。

ハヤテ

「では、愛歌さんまた今度。」

千桜

「さよなら。」

愛歌

「ええ、送つてくれてありがとうございました。」

帰つて行くハヤテと千桜を、愛歌は手を振つて見送る。

ハヤテと千桜が見えなくなると、愛歌は家中に入った。

愛歌

「今日はハヤテ君に送つてもらえて助かりましたわ・・・あ、あら? どうして私、ハヤテ君の事考てるんでしょう・・・?」

愛歌は赤面すると、じぱりくの間考え込んでいた。

翌日

三千院邸

マリア

「ハヤテ君、また紅茶の葉が切れたので買つて来てください。」

ハヤテ

「わかりました、マリアさん。」

マリア

「後ハヤテ君、少しお小遣いを渡しますので何か好きな物でも買つてください。」

ハヤテ

「あ、はい・・・って、え?」

ハヤテは渡されたお札数を見て、少し驚いた。

なぜなら私の額は、30000円もあったからだ。

ハヤテ

「マリアさん……お小遣いが30000円ついてるんじゃないですかー？」

マリア

「そうでもありますよ。ナギもお小遣い50000円くらいありますし、私も40000円はもうありますよ。」

ハヤテ

「ああ、そうなんですか・・・」

ハヤテは改めて、三千院家のズボンを脱い出した。

ハヤテ

「では、買い物に行つて来ます。」

ハヤテは手提げ袋を掴むと、買い物に出かけた。

ハヤテ

「あれ？ 愛歌さん？」

玄関を出たハヤテの前に、愛歌が立っていた。

愛歌

「こんなにちは、ハヤテ君。」

愛歌はお辞儀する。

愛歌は靈家のヒヤの車で来ていた。

ハヤテ

「愛歌さん、どうしたんですか？」

愛歌

「ちよつとヒマだったので、三井院家に遊びに・・・ハヤテ君は何をしに来なさですか？」

ハヤテ

「ちよつと買い物にね・・・」

愛歌

「そひですか・・・あー私も買い物につき合って良いですか？」

ハヤテ

「別に良いですよ？」

愛歌

「じゃあ、車で一緒に行きましょつ。」

ハヤテは愛歌と一緒に、車に乗り込んだ。

車は田舎地に向かつて走り出した。

某店

ハヤテはいつも行くお店で、紅茶の葉を買つた。

ハヤテ

「買えました、愛歌さん。」

愛歌

「これでハヤテ君の用事は済みましたね。あ、そうだ。私の買い物につき合ってくれませんか?」

ハヤテ

「買い物ですか?」

愛歌

「はい。近くのデパートに。」

ハヤテ

「ええ、良いですよ。」

愛歌

「じゃあ、行きましょう。」

ハヤテと愛歌は、デパートに向かつた。

ハヤテと愛歌は、『パーティにやつて来た。

ハヤテ

「こないだマリアさんと『パーティに来た事があるんですが、最近流行の服が売られているみたいですよ。』

愛歌

「そりなんですか。あ！」

ハヤテ

「どうしましたか、愛歌さん？」

ハヤテが愛歌に話しかけた。

愛歌は水着売り場に目をやつている。

ハヤテ

「水着ですか？ そりいえば新作水着が発売したとか瀬川さん達が言ってましたねえ・・・」

愛歌

「ええ、そろそろ新しい水着を買おうかと思っていたのですが・・・ 私、最近の流行とか少し疎いので・・・」

ハヤテ

「じゃあ、ボクが聞いてきますよ。」

そつ言つと、ハヤテは近くにいた女性店員に聞きに行つた。

それから数分で、ハヤテは戻つて來た。

ハヤテ

「聞いて來ましたよ、愛歌さん。何かカタログももらつて來ちゃいました。」

愛歌

「そ、そうですか・・・」

多分ハヤテは女性客だと間違えられたんだろう・・・

愛歌はそつ思いながら、ハヤテに聞いた。

「それで、流行りの水着といつのは・・・？」

愛歌

「ああ、これです。」

ハヤテ

ハヤテはカタログに記載してある印を愛歌に見せた。

愛歌

「へへ、これがそなんですか。」

ハヤテ

「その水着も持つて來もらつたので・・・愛歌さん、試着します？」

愛歌

「ほえ！？あ、はい・・・」

愛歌は赤面しながら、水着を受け取る。

そして、愛歌は試着室に向かった。

数分後、ハヤテと愛歌は3階のゲームコーナーに来ていた。  
愛歌の手には、先程の水着が入った紙袋が握られている。

結局あの後購入したようだ。

愛歌

「ありがとうございます、ハヤテ君。おかげで良いのが買えました。」

「

ハヤテ

「いえいえ。あ！あのコトのキャラに良いヌイグルミがあり  
ますね。」

ハヤテは向こうの方にある機械を見た。

愛歌

「あ、ホントだ。カワイイなあ・・・」

ハヤテ

「欲しいのならボクが取りましょうか？」

愛歌

「えー? あ、はい・・・」

ハヤテ

「じゃあ、やつて来ますね。」

ハヤテはそう言つてひょうきヤツチャーに向かつて、数秒でヌイグルミを取つて來た。

ハヤテ

「はい、取つて来ましたよ。」

愛歌

「あ、ありがとうございます。・・・」

愛歌は頬を染めながら、ヌイグルミを受け取つた。

ハヤテ

「じゃあ、そろそろ帰ります?」

愛歌

「そうですね。」

ハヤテと愛歌は、駐車場へと向かつた。

ハヤテ

「じゃあ、ボクはもう帰りますね。」

「

愛歌

「あ、はい。今日は色々ありがとうござります・・・」

ハヤテ

「では、また学校で。」

ハヤテはそう言つと、疾風の如くで帰つて行つた。

愛歌

「ハア、どうしたんでしょう私・・・まだドキドキしますわ・・・」

愛歌は赤面しながら、靈家の車で帰宅した。

そして、月曜日

ハヤテはいつも通り、1人で学校に来ていた。

ナギは今日も来ていない。

ハヤテ

「ハア、今日も来てくれないやお嬢様・・・」

ハヤテはため息をつきながら、校舎へと入った。

授業が終わり、お昼休みになる。

昼食をどうしようか考えていたハヤテに、愛歌が近づいて来た。

愛歌

「あ、あの、ハヤテ君・・・」

ハヤテ

「何ですか、愛歌さん?」

愛歌

「今日私、お弁当作つて来たんですが、ハヤテ君の分も作つて來たんですよ。良かつたら一緒に食べませんか?」

愛歌はカバンの中のお弁当箱を取り出し、ハヤテに見せた。

ハヤテ

「ええ、良いですよ。お皿葉に並えます。」

ハヤテは快くOKした。

愛歌

「(やつたあ!ハヤテ君と2人でお弁当ですわ!...)」

愛歌は内心喜んでいた。

しかし」の時彼女は気づかなかつた。

前の席の方で、一やつこじる少女がいる事に・・・

ハヤテと愛歌は、人気のない森まで来ていた。

愛歌

「ハヤテ君、丁度あそこにベンチがありますよー。」

ハヤテ

「良いですね、座りましょうか。」

ハヤテと愛歌はベンチに座ると、お弁当箱を広げた。

ハヤテはお弁当箱を空けると、おかずを一つ食べた。

パクッ！

モグモグ・・・

愛歌

「ど、どうですか？」

ハヤテ

「ええ、とてもおこしこどもよ。料理上手なんですね、愛歌さん

愛歌

「えーーーそ、そりですか・・・誉めてくれて嬉しいですわ・・・」

力アアアアアア・・・

愛歌は赤面する。

それから30分ほどかかって、ハヤテと愛歌はお弁当を食べ終わった。

ハヤテ

「あ～、よく食べました・・・それにしてもとてもおいしかったです、愛歌さんのお弁当。」

愛歌

「そ、そりですか？ あんなので良ければ、また作りますけど・・・？」

ハヤテ

「では、またお願いしますね」

愛歌

「は、はい・・・」

愛歌はまた赤面する。

すると、ハヤテと愛歌の足下に黒いネコが歩いて来た。

ハヤテ

「あ、シリヌイ。」

愛歌

「え？ 」のナハヤテ君トロのネコなんですか？」

ハヤテ

「ええ。お屋敷で飼つてるんですよ。おいで、シラヌイ。」

ハヤテがそういって、シラヌイはパンとハヤテの腕の中に入つた。

愛歌

「人懐っこいですねえ。」

ハヤテ

「ヒナギクさん達が生後間もなく拾つたので、結構懐きやすいんですね。」

愛歌

「そうですか。あ、私も抱いて良いですか・・・？」

ハヤテ

「良いですよ。はい。」

ハヤテは愛歌にシラヌイを手渡す。

シラヌイはすぐに愛歌の腕の中に入つた。

愛歌

「あ、ああ・・・カワイイ・・・」

愛歌は夢中になつてシラヌイを撫でている。

すると、シラヌイが腕の中からズリ落ちて愛歌の制服の中に入つた。

ズルツ！

スポーツ！

愛歌

それを見たハヤテは顔を赤くして思わず愛歌から田を背ける。

まあ情緒が小学生並みたからといふのも理由の1なのだが

愛歌

1

「取つてと言われましても・・・」

そう、情緒が小学生並みのハヤテにそんな事ができるハズもない。

それでも何とかしようと、  
愛歌に近づいた。

ハヤ元

もちろん、シラヌイだつていたくて愛歌の服の中にいるワケではない。

落ちて慌てているのだから、シラヌイも必死に抜け出そうとしているのである。

そしてハヤテが愛歌を搔き落とした、その時だった。

シラヌイが愛歌の服から飛び出したのだ。

ポン！

その反動で、愛歌がふりじゃつぐ。

愛歌  
「あ・・・・・！」

ハヤテ

「愛歌さん、危ない！・！」

愛歌

「キヤア！・！」

ハヤテ

「うわあ！・！」

ハヤテと愛歌は、そのまま倒れ込んだ。

ハヤテ

「アタタ・・・大丈夫ですか愛歌さ・・・」

愛歌さんと言いかけて、ハヤテはフリーズした。

何と、ハヤテが愛歌の上に乗っていたのだ。

端から見ると、ハヤテが愛歌を押し倒しているように見える。

しかもさつきまで愛歌の服の中でシラヌイが暴れていたものだから、愛歌が汗をかいている状態なのだ。

ハヤテ・愛歌

「・・・」

ハヤテと愛歌の間にしばらく沈黙が流れる。

その沈黙を破ったのは、カメラの音だった。

パシャー!!

ハヤテ・愛歌

「!?」

ハヤテと愛歌が振り向くと、そこにはシラヌイを抱きかかえビデオカメラを持ち、ニヤニヤしている千桜がいた。

千桜

「あらあら・・・」これはとても良い写真が撮れましたねえ~」

ハヤテ

「ち、千桜さん・・・」

愛歌

「まさか、さつきの光景も・・・」

千桜

「バツチリ、ビートオに撮りせてもうござりましたよ」

ハヤテ・愛歌

「ええ〜!?

千桜

「さて、これを会長達に見せたらどうなるのでしょうか?」

愛歌

「（マ、マズイです・・・いつも千桜さんをイジメていたから・・・）のままでは仕返しを受けます!（お、お願いです千桜さん・・・それを会長達に見せる事だけはしないでください・・・）

千桜

「良いですよ?ですがその代わり条件があります」

千桜はまた一ヤリとした。

愛歌

「つ・・・（何かイヤな予感・・・）

千桜

「この事をバラされたくなーなら、今度の土曜日ハヤテ君と一日、アートしてくださいわ」

愛歌

「（や、せりぱつ〜つ!-!-!-!）

ハヤテとの光景をヒナギク達にバラさない事と引き替えて、千桜にハヤテとの一日アートを要求された愛歌。

果たして、ハヤテと愛歌の関係に進展はあるのか？

そして、愛歌を狙う謎の男達はどう動くのか・・・？

## 第05話・恋愛歌編～副会長と執事の恋物語『中編』

千桜

「この事を会長達にバラされたくないなり……今度の土曜日、ハヤテ君と一緒にデートしてください」

愛歌

「（や、やつぱつですか……）」

千桜に狙い澄ましたかのような条件をつけられ、愛歌は顔が火照つた。

愛歌

「で、でも千桜さん……私、ハヤテ君と一緒にデートするだなんて……せめて何か他の事で勘弁を……」

愛歌はじどりもどりになりながら、何とか反論しようとくる。

千桜

「デートがイヤなら、会長達にこの動画を見せるだけですよ」

愛歌

「う……」

千桜にクギを刺された。

さうじ、ハヤテがトドメとも取れる一撃を放つてしまつ。

ハヤテ

卷一  
7

「はう！」

グサツ  
！  
！

愛歌に見えない槍が突き刺さつた。

こうなると、もはや彼女に反論の余地はない。

愛歌

千 横

千桜は笑顔で言つ。

八  
ヤ  
テ

「じゃあ、愛歌さん。土曜日はお願いしますね」

ハヤテは愛歌に微笑む。

# 愛歌

「は、はいです。・・・」

愛歌は赤面しながら言つ。

結局、千桜の策略にハマってしまった愛歌であった。

そして、あつとこう間に金曜日

夕方ハヤテは白皇学院から帰つて来ると、自分の部屋にいた。

ハヤテ

「明日はいよいよ愛歌さんと一日デートか・・・緊張するなあ・・・

」

ハヤテが指立て伏せをしながらそんな事を考えていると、ハヤテの携帯電話が震えた。

ブルル、ブルル・・・

ハヤテは携帯を手に取る。

ハヤテ

「千桜さんからメール?」

千桜からメールが来た。

『ハヤテ君、明日はいよいよ愛歌さんと一日デートですね。2人は明日、私が指定した遊園地に行つてもらいます。楽しんでくださいね、ウフフ・・・』

ハヤテ

「千桜さん、何で楽しそうな文面なんだろう・・・？」

ハヤテは千桜と愛歌の関係を知らない。

同じ頃、電話でも愛歌の携帯に千桜からのメールが届いていた。

愛歌

「どうとう明日になってしまったねえ・・・ハヤテ君との一日デート・・・」

愛歌はため息をついている。

愛歌

「千桜さんめ・・・彼女にあの動画さえ撮られなければ、私をこんな田には遭わせられなかつたというのに・・・」

愛歌は千桜にハヤテとの光景を動画に撮られた事を悔しく思つていた。

しかし、今さら悔しがつても仕方ない。

愛歌

「まあこうなつてしまつた以上しようがないです。明日は楽しませてもらいましょうー！ハ、ハヤテ君とのデートを・・・」

愛歌は真っ赤になりながら、ベッドに突っ伏した。

その夜中・・・

鵜飼秀教

「スマンな、信康。脱獄に手を貸してもらつてよ。」

カラスマノブヤス  
鳥丸信康

「例には及びませんよ、鵜飼先輩。アンタは私の恩人なんですから。私はアンタのためなら、喜んでこの身を汚します。」

秀教

「フフフ、頼もしい事を言つてくれるな。さすがはオレの後輩だ。」

信康

「フフフ、先輩にそう言つていただけると光榮ですよ・・・それからもう1人いたでしょ、後輩が。」

秀教

「ああ。確か鳳家吉だつたな。この近くに来ているのか?」

信康

「ええ、明日1日ターゲットの監視をすると言つてました。」

秀教

「そつか。とにかくおの方のためにも、必ずや成功させねばなんな。」

信康

「ええ、そうですね。」

鶴飼秀教と鳥丸信康は、謎の会話をしていた。

翌日、土曜日

ハヤテ

「今日は愛歌さんと一日デートかあ。何を着て行こう・・・・・」

ハヤテは30分考えて、結局いつもの執事服を着て行く事に決めた。

ハヤテ

「さて、マリアさんとお嬢様に説明をしに行かないと・・・・・」

ハヤテは少し赤面しながら、部屋を出る。

すると、外にはマリアとナギが立っていた。

マリア

「あら、ハヤテ君。」

ナギ

「おはよー、ハヤテ。」

ハヤテ

「うわあー、マリアさん、お嬢様！ー！」

ナギ

「聞いたぞハヤテ。愛歌さんとデートするんだってな。」

ハヤテ

「うーー！な、なぜそれを・・・ー？」

マリア

「千桜さんから昨日電話があつたんですよ。」

ハヤテ

「ち、千桜さん・・・」

ナギ

「まあ、弱みを握られているんじゃしうがない。今日は一日休みにしてやるから、気にせず愛歌さんとのデートを楽しんで来い。」

ハヤテ

「は、はい、ありがとー！」わざわざ・・・」

ナギ

「とにかく、その愛歌さんについてなんだが・・・どうやら、このいだ愛歌さんを誘拐しようとした男が脱獄したりしい。」

ハヤテ

「ええ、それは知っています。」

ナギ

「それについてマリアと2人で調べていたんだが、どうやらソイツには仲間が2人いるらしい。」

ハヤテ

「な、何ですって！？」

ナギ

「後、その3人の上に大ボスがいるらしい。」

ハヤテ

「何かの組織つて事ですか？」

マリア

「そういう事だと思います。」

ナギ

「ハヤテ、気をつけてくれよ。何だかイヤな予感がするんだ・・・」

ハヤテ

「大丈夫です、お嬢様。愛歌さんは絶対守り抜いてみせますよ。」

ナギ

「フフツ、それでこそハヤテだ。」

ハヤテ

「では、行つて来ます。」

マリア

「行つてらつしゃい」

ハヤテは出かけて行つた。

一方、愛歌の方は・・・

千桜

「いよいよ今日ですね、愛歌さん」

愛歌

「え、ええ・・・」

千桜

「せつかぐテートなんですから、めかし込んで行つたりどりですか？」

愛歌

「な、何言つてるんですか千桜さん！..めかし込んだりなんてしませんよ！それにこんな事、もしお母様に聞かれたら・・・」

「私がどうかしましたか？」

愛歌

「！..」

愛歌が恐る恐る振り向くと、そこには愛歌の母親である靈静音が立

つていた。

愛歌

「お、お母様……おせむりいれこみす……」

カス//シズネ  
霞静音『恋歌の母』

「はい、おはよい。といひで恋歌ひやん?」

愛歌

「は、はいー?」

静音

「朝から嬉しそうだけど何かあったのかなあ?」

愛歌

「な、何でもないんですー何でも……」

愛歌は「まかわいとしたが……

千桜

「愛歌さん、今田三千院家の執事とデートあるんでよ」

千桜にダメ出しされた。

愛歌

「ちよつ、千桜さんーんー?」

静音

「くはー、愛歌ちゃんもつこびーーーする粗末ができたのねーで、  
そのナの女郎は?」

愛歌

「あ、綾崎ハヤテ君といつ人です・・・とても優しい男の子で・・・

「

静音

「フーン？ 愛歌ちゃんは綾崎君が好きなのね？」

愛歌

「そ、そんなのでは・・・」

静音

「照れなぐても良いのよ～ さて、せつかくデートするんだから  
愛歌ちゃんもおめかしして行かなきゃね」

そ、つ、言、う、と、静音は愛歌に近づいて來た。

愛歌

「あ・・・（マズイ・・・）のままでは私の貞操が・・・逃げなく  
てはーーー」

愛歌はそ、つ、想、い、逃、げ、出、そ、う、と、した、が、・、・、

ガシッ！

愛歌

「えー？」

右腕を千桜に掴まれた。

愛歌

「ち、千桜さん！…は、放してください…！」

千桜

「ダメ、放しません」

千桜は微笑んでいる。

愛歌

「う・・・（楽しんでる・・・）の娘、絶対この状況を楽しんでる  
！…」

静音

「さ、愛歌ちゃん お着替えしましょつね～」

静音が一口号と微笑む。

愛歌

「あ・・・キヤ～ツ！…！」

靈邸に、愛歌の悲鳴が響き渡つた。

某遊園地

ハヤテ

「遅いですね、愛歌さん…・・・」

ハヤテはある遊園地で、愛歌が来るのを待っていた。

すると・・・

「ハヤテくん!!」

愛歌の声が聞こえてきた。

ハヤテ

「愛歌さんー待つてましたよ・・・えー?」

走つて来た愛歌を見て、ハヤテは絶句する。

なぜなら愛歌は、ゴスロリメイドの格好をしていたからだ。

ハヤテ

「愛歌さん・・・その服は・・・」

愛歌

「はい・・・千桜さんと静音お母様に着せられてしまつて・・・」

ハヤテ

「そ、そりなんですか・・・大変だつたでしょ?」

愛歌

「ええ、大変でしたよ・・・ここに来るまで、通行人の視線釘付けでしたし・・・」

愛歌は赤面している。

千桜

「フフフ……」

そんな愛歌を、遠くから千桜が不敵な笑顔で監視していた。

愛歌

「恥ずかしいですよ、こんな格好……」

ハヤテ

「そうですか？愛歌さん似合ってますし、良いと思いますよ。」

愛歌

「ほ、本当ですか？」

ハヤテ

「ええ、とてもカワイらしさですよ。」

愛歌

「は、はううううう……」

愛歌は頬が赤リンゴに染まる。

千桜

「チツ……」

そんな愛歌を見て、千桜は不機嫌になっていた。

ハヤテ

「さ、愛歌さん。行きましょう。」

愛歌

「あ、はい！」

ハヤテと愛歌は、奥へと進んで行く。

千桜

「いけない、私も追わなければ！…！」

千桜は後を追つて行つた。

ハヤテと愛歌は、オバケ屋敷に来ていた。

ハヤテ

「雰囲気ありますね、ここ。」

愛歌

「そ、そりですね…。」

愛歌はハヤテにしがみついている。

ハヤテ

「あれ？もしかして愛歌さん…。」

愛歌

「え、ええ…。私、じつこの苦手なんです…。」

愛歌は震えている。

ハヤテ

「大丈夫ですよ、愛歌さん。ボクがあなたを守りますから」

ハヤテは微笑む。

愛歌

「は、はい・・・」

愛歌はその笑顔に赤面した。

その時、オバケが飛び出してきた。

愛歌

「キヤーッ！！」

愛歌はハヤテに抱きつぐ。

ハヤテ

「走りましょう、愛歌さん！..！」

ギュッ！

ハヤテは愛歌の手を握ると、走り出した。

愛歌

「は、はう・・・」

愛歌は赤面しながら、ハヤテに引っ張られて行つた。

ちなみに千桜はといつと・・・

中間辺りで氣絶していた。

しばらくして千桜が居場所を突き止めて追いついて来た時には、ハヤテと愛歌は遊園地内のレストランにいた。

千桜

「フウ、やつと追いついた・・・怖すぎですよ、ここのオバケ屋敷・・・」

千桜はハヤテと愛歌の近くにある席に座つた。

ハヤテと愛歌は昼食を食べている。

ハヤテ

「おいしいですね、ここの料理。」

愛歌

「や、そうですね・・・」

順調に食べ進めるハヤテに対し、愛歌はあまり進んでいない。

ハヤテ

「 もういえば今日はテークしてくるんですよね、ボク達。」

愛歌

「 ほえ！？そ、もういえばもうでしたね・・・」

愛歌は狼狽えている。

ハヤテ

「 それじゃあ、こんな事もしないといけませんよね。」

ハヤテはスペゲッティをフォークで巻くと、愛歌に差し出した。

愛歌

「 ！」、これは何ですか？

ハヤテ

「 何つて、テークの定番『食べさせ合いつ』ですよ、愛歌さん、あ～ん！」

愛歌

「 えええええ～！～」

愛歌は絶叫した。

ハヤテ

「 あ～ん 」

ハヤテは笑顔で言つ。

愛歌はその笑顔に見惚れてしまった。

愛歌

「あ、あ～ん・・・」

愛歌は観念したのか、口を開ける。

その瞬間、ハヤテが愛歌の口にスペゲッティを入れた。

ハヤテ

「えい！」

パク！

モグモグ・・・

ハヤテ

「どうですか、愛歌さん？」

愛歌

「お、おいしいです・・・」

ハヤテ

「良かつたです」

ハヤテの笑顔に、愛歌はまた赤面した。

愛歌

「もう・・・その代わり、私も食べさせますからねー」

ハヤテ

「フフフ、良いですよ」

ハヤテと愛歌は、その後も食べさせ合っこしを続ける。

千桜は赤面しながら、ビートオカメリを回していた。

料理を満喫したハヤテと愛歌は、観覧車がある広場に来ていた。

千桜もコッソリとついて来ている。

ハヤテ

「愛歌さん、観覧車に乗りませんか？」

愛歌

「ええ、良いですよ。私はヒナギクとちがって高所恐怖症ではありませんので。」

ハヤテ

「ハハッ、ヒナギクさんが聞いたら怒りますよ？」

物陰で見ていた千桜も、『確かに・・・』という表情をしている。

ハヤテ

「じゃあ、乗る前にトイレに行つて来ますので、愛歌さんはそこ」のベンチで待つてください。」

愛歌

「あ、はい・・・」

ハヤテは男子トイレへと走って行つた。

愛歌

「フウ。 もう、と・・・」

ハヤテの姿が見えなくなると、愛歌は茂みの方を向きながら「ひづ

つた。

愛歌

「千桜さん、そこここるでじょ、ひへ出で来なセー。」

千桜

「アハツ、やはりバレましたか。」

千桜が笑いながら出て來た。

愛歌

「全く・・・お母様の命令で私達を尾行していただじょう・・・?」

愛歌は呆れながら言ひ。

千桜

「別に良いじゃないですか、見られて減るもんじゃないし。バツチ  
り見せてもうござましたよ。ハヤテ君とのハグラブぶりを」

愛歌

「なあつ! 一いつて事は・・・オバケ屋敷の時とレストランの時も・・

・？

千桜 「バツチリ見てましたよ」

愛歌 「えええ～！～！」

千桜 「レストランの時はさすがに赤面しちゃいましたけどね」

愛歌 「ううう・・・」

愛歌は顔が真っ赤になつた。

「千桜さん・・・帰つたら覚えておきなさいよ？」

愛歌は何とか優位に立とうとする。

千桜

「そんな事言つて良いんですかね～？」

対する千桜は余裕タップリだ。

愛歌

「ど、ど、どう意味です？」

千桜

「ハヤテ君とのデートはずっとビデオカメラに撮つてあるんです。私に何かした場合、ヒナ、ギク達にこの動画を全部観せますよ」

愛歌

「ええ～！！」

千桜

「イヤなら、家に帰つても私に何かしない事ですね」

愛歌

「う、うう～・・・」

愛歌は千桜にお仕置きする事を諦めざるを得なかつた。

愛歌

「く、悔しいです・・・千桜さんに何もできない日がくるなんて・・・」

千桜

「アツハツハ。じゃあ、デートの続きを楽しんで来てくださいね」

千桜は笑うと、茂みへと戻つて行く。

愛歌

「うう～、とても悔しいです～・・・」

「何が悔しいんですか？」

愛歌

「はう～？」

突然の声に愛歌が振り向くと、ハヤテが立っていた。

愛歌

「ハ、ハヤテ君……」

ハヤテ

「愛歌さん、何か悔しい事でもあつたんですか？」

愛歌

「な、何でもないですよ……」

愛歌は狼狽えている。

ハヤテ

「そうですか。じゃあ、観覧車に乗りに行きましょー!」

愛歌

「あ、はい……」

ハヤテと愛歌は、観覧車乗り場へと歩いて行った。

ハヤテと愛歌は、観覧車に乗っていた。

千桜は3つ田に乗っている。

ハヤテ

「今日は1日楽しかったですね、愛歌さん。」

愛歌

「そ、そうですね・・・」

正直愛歌としては千桜に監視されていたので、あまり楽しめたとは言えないかも知れない。

ハヤテ

「また機会があれば、2人で来たいですね。」

愛歌

「わ、私なんかで良ければいつでもつき合いますよ・・・」

ハヤテ

「そうですか。今日は愛歌さんのカワイイ面をたくさん見られて良かったです」

愛歌

「・・・ハヤテ君、これは今田一田つき合ってくれたお礼です」

愛歌はハヤテの頬にキスをした。

チユツ！

ハヤテ

「愛歌さん・・・」

愛歌

「あ、また一緒に来ましょうね？」

ハヤテ

「はい、愛歌さん」

ハヤテは笑顔を見せる。

愛歌はその笑顔に頬を染めた。

しづらしくして、ハヤテと愛歌は観覧車から降りた。

ハヤテ

「じゃあ、もう帰りましょうか。」

愛歌

「わづですね。」

ハヤテ

「あ、これボクのメルアードと電品番号です」

愛歌

「ど、どうも……」

愛歌は赤面しながらハヤテの番号とメルアードを登録した。

ハヤテと愛歌はしづらへ歩く。

入口に着くと、千桜が2人を待っていた。

ハヤテ

「では、また。」

ハヤテは疾風の如くで帰つて行つた。

千桜

「じゃあ愛歌さん、私達も帰りましょうか？」

愛歌

「え、ええ・・・」

千桜と愛歌は、霞邸へと帰つた。

しかしこの時彼女達は気づいていなかつた。

2人を監視する男、鳳家吉がいた事を・・・

霞邸

愛歌は自分の部屋で、私服に着替えていた。

愛歌

「全く、千桜さんは・・・」

愛歌は愚痴を言つてゐる。

愛歌

「普段おとなしい人ほどキレると怖いと言つますが、まさにその通りですね・・・」

愛歌はため息をついた。

ちなみに、その千桜はリビングにいた。

千桜はメイド姿で、片づけをしている。

千桜

「 」

千桜はご機嫌のようだ。

その一時を、壊そつとしている者達がいた。

脱獄した誘拐犯の鶴飼秀教と、秀教の仲間である鳥丸信康・鳳家吉の3人である。

彼らはある男の命を受け、霞愛歌を誘拐すべく霞邸の場所を突き止めたのだ。

そして今、3人は霞邸の前にいるのである。

秀教

「ここが霞邸か・・・この家、裏口とかあるのか?」

鳳家吉

「ええ、昼間に私が見つけておきました。」

秀教

「フツ、さすがは組織一の隠密兵。手際の良さがちがつ。」

家吉

「お誉めに<sup>あづか</sup>なり光榮です。さて、行くか信康。」

信康

「ああ。秀教先輩はここで待ってください。」

秀教

「おう。」

信康と家吉は、裏口からコツソリ霞邸へと入って行った。

家吉

「それで、ターゲットはどこにいるんだ・・・?」

信康

「どうも金持ちの家はわからん。」

家吉と信康は、霞邸内を捜索していた。

家吉

「 いじか？」

家吉はリビングの扉を開ける。

そこには、メイド姿の千桜がいた。

千桜

「え？」

千桜は家吉とすれ合わせする。

家吉

「 オマエ、 いじの家の娘か？」

家吉は千桜に近寄る。

千桜

「あ・・・あ・・・」

千桜は後退りした。

一方愛歌は自室で、 ハヤテの事を考えていた。

愛歌

「 今日のハヤテ君、 とてもカッコ良かつたですわ・・・私、 やっぱり彼の事を好きになってしまったようですね・・・」

愛歌は頬を染める。

愛歌

「今度、ハヤテ君に告白しましょう・・・彼、受け入れてくれるといいんですけど・・・」

愛歌が呟いた、その時だった。

千桜

「キャアアアアアーーー！」

千桜の悲鳴が聞こえてきたのは。

愛歌

「千桜さんーーー？」

愛歌は悲鳴のする方へと走って行く。

タタタ・・・

愛歌がリビングに着くと、千桜が家計に押されつかられていた。

愛歌

「ち、千桜さんーーー！」

愛歌は千桜に駆け寄りついた。

千桜

「あ、愛歌さんー早く逃げてくださいーーー！」

千桜は必死に叫んだ。

愛歌

「え・・・・・?」

愛歌が後退りした、その時・・・

ガバッ!!

愛歌

「キヤツ!?

愛歌は後ろから信康に羽交い締めにされた。

愛歌 「な、何ですかあなたは!?は、放してください!-!-」

信康は無言でハンカチを取り出す。

スツ!

愛歌

「放し・・・ムグツ!-!-」

叫ぼうとした愛歌の口を、信康がハンカチで塞いだ。

千桜

「愛歌さん・・・うぐつ!-!-」

『愛歌さん!-!-』と叫ぼうとした千桜も、家吉に口をハンカチで塞



千桜をテーブルの脚にロープで縛りつけた家吉も、後を追つて行く。

玄関から愛歌を連れ出した信康と家吉を、秀教が待っていた。

信康が愛歌を停めてあつた車の後部座席に押し込んでから続いて乗り込み、家吉は助手席に乗る。

秀教は運転席に乗り込むと、何事もなかつたよつに車を発進させたのだった。

ブオオオオオ・・・

秀教ら3人組に襲われ、誘拐されてしまつた愛歌。

果たして愛歌の運命はいかに！？

そして、ハヤテと愛歌の恋の行方は・・・！？

## 第06話・靈愛歌編～副会長と執事の恋物語『後編』

愛歌と千桜が秀教達3人組に襲われ、愛歌が誘拐されてから30分後・・・

ハヤテは霞邸にやつて來ていた。

なぜ彼がここに來ているのかといつと・・・

実はハヤテ、デート中に愛歌に渡すハズだったプレゼントを渡し忘れていたのだ。

そのため、ヒナギクに住所を聞いてプレゼントを渡しに來たのである。

ハヤテ

「愛歌さん、喜んでくれると良いんですけど・・・」

ハヤテは階段を上り、玄関の前に立つ。

ハヤテ

「ん？ ドアが少し開いてる？」

ハヤテは少し開いているドアを開け、霞邸の中に入った。

ハヤテ

「・・・？ 向いの方から何か呻き声のようなものが聞こえてくる・・・」

ハヤテは呻き声のする方へと走つて行つた。

タタタ・・・

ハヤテ

「ここ・・・リビングルームからみたいですね・・・」

ガチャ！

ハヤテはドアを開け、リビングへと入る。

ハヤテ

「ち、千桜さん！？」

リビングに入ったハヤテの目に写つたのは、体をテーブルの脚に縛りつけられ、口をガムテープで塞がれたメイド姿の千桜だった。

千桜

「ん、んんんん！（ハ、ハヤテ君！）」

千桜はジタバタともがいている。

ハヤテ

「千桜さん、大丈夫ですか？」

ハヤテは千桜に近寄ると、口のガムテープをはがした。

ピリリ！

千桜

「イ、イタタタ……」

ハヤテ

「何があつたんです？」

ハヤテは千桜に話しかけながら、彼女を縛りつけているロープをほどいた。

バサツ！

千桜

「ハヤテ君、ゴメンナサイ！突然侵入して来た2人組に、愛歌さんが誘拐されてしまったんです……！」

千桜は泣きながら、ハヤテに抱きついた。

ハヤテ

「な、何ですってー愛歌さんがさらわれた！？」

ハヤテは千桜の足の縄もほどく。

バサツ！

ハヤテ

「一体何があつたのか、話してくれますか？」

千桜

「私がリビングで片づけをしていたら、突然男が入つて来て……悲鳴を上げた瞬間、床に押さえつけられたんです。その後リビングに入つて来た愛歌さんが後ろからもう一人の男に羽交い締めにされ

て、ハンカチで口を塞がれました。私は叫ぼうとしたんですが、私を押さえつけていた男に口をハンカチで塞がれて……愛歌さんが氣絶したすぐ後、私も氣絶してしまったんですよ……」

ハヤテ

「恐らくハンカチには睡眠薬が染み込まれていたんじゃない。だから氣絶してしまったんですよ。」

千桜

「ゴメンナサイ、ハヤテ君……愛歌さんを守れなくて……」

ハヤテ

「千桜さんのせいじゃないですよ。とにかく、犯人達からの連絡を待ちましょ。」

千桜

「ええ、そうですね……」

千桜は少し俯いていた。

愛歌

「ん……」

愛歌

頭がクラクラする中、愛歌は目を覚ました。

「うん……」はい・？・？

愛歌は辺りを見回す。

愛歌

「頭が痛い……そうだわ、私……千桜さんを助けようと駆け寄  
るのとしたら、後ろから口を塞がれて……」

愛歌は何があつたのかを思い出した。

愛歌

「体が動かない……手足も……」

愛歌は体を懸命に動かしたが、全く動かなかつた。

愛歌

「うう……」

愛歌が俯いていると、薄暗い部屋に光が入つた。

愛歌がいる部屋のドアが開けられたのだ。

ガチャ！

愛歌

「！？」

愛歌は声のした方を向く。

彼女は照らされた光で、自分の体と手足がロープで縛られているの

に気づいた。

秀教達3人が部屋に入つて来る。

信康

「おつと、愛歌嬢が起きたみたいだよ。」

家吉

「そのよつだな。」

秀教

「気分はどうだ？ 愛歌嬢。」

愛歌

「最悪ですわ・・・」

愛歌は秀教達を睨みつけた。

愛歌

「あなた方は何なんですか？ 誰の命令で私を拉致したんですか？」

秀教

「オレ達か？ オレ達はな、『ヤタガラス八咫鳥』の一員さ。」

愛歌

「や、八咫鳥！？」

愛歌は驚く。

「おお、やつと愛歌嬢を拉致できたか。」

秀教

「おっ、オレ達のボスの『』登場だ。」

声のする方に秀教達が向くと、初老の男が部屋に入つて來た。

ザツ、ザツ・・・

愛歌

「あなたは・・・鳳凰院翁・・・・・・」

ホウオウイイズオキナ

鳳凰院翁『八咫鳥のボス』

「ホホオ、さすがは三千院帝に溺愛されている霞家の娘・・・ワシの事を知つておつたか。」

愛歌

「ええ、かつておじい様がやつていた大ビジネス・・・その時の協力相手の1人があなただと、おじい様から聞いてますわ。」

翁

「ご明察・・・その通りじゃ。」

愛歌

「改めて聞きます。どうして私を誘拐させたのですか?」

愛歌は翁を睨んだ。

翁

「ワシラの目的はまた後で教えてやるよ。とりあえず、お嬢さんの携帯電話の在処を教えてもらおうか。」

愛歌

「イヤです、と言つたら？」

翁

「お嬢さんのカワイイ顔や肌にキズがつくだけじゃ。」

翁はニヤつきながら言つ。

愛歌

「う・・・わかりました・・・」

愛歌は俯くと、電話の在処を教えた。

所変わつて、三千院邸

三千院邸では、ハヤテ達が大広間に集まつていた。

ナギ

「愛歌さんがさらわれたつていうのは本当かー？」

ハヤテ

「ええ、本当です。入つて来たのは2人で、愛歌さんと千桜さんを襲つた後愛歌さんだけ連れて逃げたそうです。」

ナギ

「そつか。それは困つた事態になつたな・・・」

4人の間に沈黙が流れる。

すると、突然ハヤテの携帯電話が鳴つた。

ピリリ、ピリリ・・・

ハヤテ

「電話ですーー。」

千桜

「発信者は愛歌さんのようですね。」

ナギ

「恐らく愛歌さんの携帯を奪つて、それでかけているんだろう。」

マリア

「ハヤテ君、なるべく会話を引き延ばすんですよ。」

ハヤテ

「はい、わかつてます。」

ハヤテはそつと、携帯を耳に当てた。

ハヤテ  
「もしもし・・・?」

翁

「三千院家の執事、綾崎ハヤテか?」

ハヤテ

「そうです。あなたは何者ですか？」

翁

「ワシの名は鳳凰院翁。三千院帝が昔やつていたベンチャービジネスに協力した企業グループ『ハ咫鳥』の総帥じや。」

ハヤテ

「ハ咫鳥の総帥？」

ナギ

「なつ・・・!？」

マリア

「何ですって!？」

ナギとマリアは、ハヤテが発した『ハ咫鳥』といつ単語に過敏に反応した。

ハヤテ

「鵜飼秀教達に靈愛歌さんを誘拐するよつ命じたのは、あなたですね？」

翁

「勘が鋭いよつじやな。その通りじやよ。」

ハヤテ

「あなたの目的は何ですか？」

翁

「最近の少年は話を進めるのが早いな。目的はズバリ金じゃ。靈園  
歌嬢を助けたくば、三千院帝名義で5億7千万円を用意しろ。」

ハヤテ

「帝さん名義で？」

ナギ・マリア

「…」

この言葉に、ナギとマリアはまたも驚く。

翁

「そうじや。決して他の者名義のお札を一枚でも入れない事。良い  
な？」

ハヤテ

「…わかりました。じゃあ、愛歌さんの声を聞かせてもらひえま  
すか？」

翁

「良かひつ。愛歌嬢の声を聞かせてやる。ただし、簡潔にな。」

翁は携帯電話を愛歌の耳元に近づけた。

ス…

愛歌

「ハ、ハヤテ君…？」

ハヤテ

「愛歌さん！大丈夫ですか！？」

愛歌

「え、ええ・・・今は何とか大丈夫です・・・手足と体を縛られて  
いますけど・・・」

ハヤテ

「そうですか・・・」

翁

「身代金を運ぶ役は、後ほど連絡する。ではな。」

翁がそつまつと、電話が切れた。

ナギ

「帝のジジイ名義で金を用意しろと言つてくれるとはな・・・」

ハヤテ

「お嬢様とマリアさんは、犯人の事を知つてゐるんですか？」

マリア

「ええ・・・ハ咫鳥といえば、かつて帝おじい様が行つていたベン  
チャービジネスに協力していた企業ですわ・・・」

ナギ

「その企業の総帥が、鳳凰院翁というヤツだつたんだ・・・その後  
ハ咫鳥独自の事業が失敗したんだが、ジジイは一切援助しなかつた  
な・・・それ以降行方をくらましていたんだが、まさかこんな形で  
復讐を狙つてくるとは・・・」

千桜

「愛歌さん、大丈夫でしょうか・・・」

マリア

「ハヤテ君、帝おじい様には私が連絡しておきます。」

ハヤテ

「よろしくお願ひしますね。」

ハヤテ達は、愛歌の身を心配していた。

愛歌は薄暗い地下室で、ロープを解こうと必死になっていた。

愛歌

「う~ん、う~ん!..」

愛歌はジタバタともがいでいる。

愛歌

「う~ん!..」

愛歌は必死にもがくが、ロープは全くほじけない。

愛歌

「う~ん、全然ほじけません・・・」

愛歌はうなだれる。

愛歌

「まさか、帝おじい様の関係者だつたなんて・・・私、これからどうなつちやうんでしよう・・・」

愛歌が俯いていると、地下室の扉が開いて翁達が入つて来た。

ガチャ！

愛歌

「！！」

「ッ」「ッ」

秀教

「氣分はどうだ、愛歌嬢？」

愛歌

「最悪ですわよ・・・」

翁

「まあ、そう言つな。金をえ受け取れば無事に返してやるわ。」

愛歌

「とにかく、あなたとその3人組はおじい様に何の恨みがあるんですか？」

翁

「

「「マイシラとワシの帝への恨みが何かと聞いたな？フフフ……」  
イツラの親はな、帝のせいで自殺したんじゃよ。」

愛歌

「な、何ですって！？」

翁

「秀教の父である鶴飼秀定、信康の父である鳥丸信輝、家吉の父である鳳家重の3人はな、ワシの組織で公務員をしていたのだ。帝との協同ビジネスが一度成功して、ワシの組織は一時期潤った。その後帝が協同ビジネスを離脱したが、ワシは自分達だけで次のビジネスも成功するだろうと安心していた……」

愛歌

「でも、そのビジネスが失敗したんですね？」

翁

「そうじゃ。ワシらは帝が援助してくれると信じ、頼みに行つた。しかしじや・・・ヤツは事もあろうに、かつての協力者であったワシらを突き放したんじゃ……」

翁は拳を震わせている。

翁

「ワシは息子が闇組織の最高責任者をやつていたため、金は何とか集める事ができた。そこで、他の3人にもこの事を伝えようと八咫鳥の寮に行つた。じゃが、ワシが寮に着いた時には……3人はそれぞれの部屋で、首を吊つっていたんじゃよ……」

愛歌

「そ、そんな事が…・・・」

翁

「幸い秀定達3人の保険金のおかげで、彼らの息子達である「イツ  
ラは難を逃れたが・・・それでもこの者らの三千院帝に対する恨み  
は日々薄れる事はなかつたんじやよ・・・」

愛歌

「それで、帝おじい様に溺愛されている1人である私を拉致しない様からお金を取ろうとしたワケですね？」

卷之三

「モード」

「あなた達、自分勝手な人ですね・・・」

翁

「何じがと・・・?」

愛歌

「何度も言つてあげますよ。あなた達は自分勝手です。おじい様が援助してくれなかつたのは確かに良くない事かもしません。ですが、それに対して逆恨みをし犯罪に走るなんてもつてのほかです！そんな事しても、何も変わりませんあなた達は成長しません！本当に悔しいのなら、実力でお金を稼ぎおじい様を見返してみなさい……！」

愛歌は怒鳴つた。

翁

「生意氣な小娘が・・・秀教、黙らせろ。」

秀教  
「はい。」

秀教はズボンからガムテープを取り出すと、愛歌の背後に回る。

愛歌

「逆恨みで憂さ晴らしをするだなんて、あなた達は最低・・・！」

秀教

「少し黙つてろ。」

ビーツ！

愛歌

「や・・・ムウ～ツ！..」

ペタッ！

秀教が愛歌の口にガムテープを貼つた。

愛歌

「んん～つ！..」

愛歌は叫んだが、ガムテープのせいで声にならない。

信康

「全く、つるせえ小娘だ・・・」

愛歌  
「ん~、ん~・・・」

愛歌は必死に叫んだ。

翁

「これで静かになつたな。待てよ? 確かあの綾崎とかいう少年、秀教を一度倒したのだつたな・・・フフフ、良い事を思いついたぞ・・・」

・

愛歌

「んんつ! ?」

翁

「オマエ達、愛歌嬢をここに置いて別室に行くぞ。少し提案を思いついた。」

秀教・信康・家吉

「わかりました。」

翁

「おとなしくしておくんじやな、愛歌嬢・・・」

翁達は不敵に笑うと、地下室から出て行く。

愛歌

「ん~、ん~・・・」

愛歌は必死に叫んでいた。

翌日 朝

ハヤテは大広間にせつて來た。

ハヤテ

「おはよハヤテこます、マリアさん。」

マリア

「おはよハヤテこます、ハヤテ君。帝おじい様からおじい様名義でお金が届きました。昨日電話してすぐに郵送してくれたそうです。」

ハヤテ

「そうですか。」

マリア

「後、おじい様から伝言です。愛歌さんを必ず助け出してくれ、との事でした。」

ハヤテ

「おじいさん・・・わかつています。愛歌さんは必ずボクが助け出します。」

マリア

「その意氣です、ハヤテ君。」

そこまで言つた時、ハヤテの携帯電話が鳴つた。

ピリリ、ピリリ……

ハヤテ

「電話ですー。愛歌さんの携帯からーーー。」

マリア

「犯人からでしょーか?」

ハヤテ

「そーだと思ひます。」

ハヤテは電話を取る。

ハヤテ

「もしもし?」

翁

「綾崎ハヤテか?」

ハヤテ

「はい。鳳凰院翁ですね?」

翁

「そーじゅ。金の受け渡し場所を教えよう。東練馬区の勝ち虫公園  
じゃ。そこ広場に金の入つたバッグを置け。必ず1人で来いよ。」

ハヤテ

「わかつてます。それより、愛歌わんは無事ですか？」

翁

「ああ、無事じゅよ。今は薬で眠つておるがな。」

ハヤテ

「わづですか。じゅあ今から行きますので。」

翁

「楽しみにしておゐで、少年・・・・・。」

電話が切れた。

ハヤテ

「マリアさん、行つて来ます。」

マリア

「気をつけてくださいね、ハヤテ君。」

ハヤテは外へと出かけて行つた。

翁

「では今から取り引き場所に行つて来る。ワシが金を受け取つたら連絡するから、あの娘を好きにして良いからの。」

翁はそつとつと、出かけて行つた。

東練馬区 勝ち虫公園

ハヤテは勝ち虫公園にやって來た。

近くに人の氣配はない。

ハヤテは真っ直ぐ広場に行きバッグを置くと、茂みに隠れる。

しばらくすると、翁がやって來た。

翁は辺りを見回しバッグを取ると、何事もなかつたかのように車に乗りその場を後にした。

ハヤテは茂みから出て來ると、ポケットから機械を取り出した。

ハヤテ

「よし、発信機はちゃんと反応しているな・・・」

ハヤテが翁に渡したバッグには、マリアが発信機を仕込んでおいたのである。

ハヤテ

「愛歌さん・・・今から助けに行きますから・・・」

ハヤテは発信機を頼りに、走り出した。

その頃・・・

愛歌

「ん～、ん～！～」

愛歌は地下室で、ロープを解こうと必死にもがいていた。

愛歌

「んん～！～」

愛歌はジタバタともがくが、一向にロープは解けない。

愛歌

「つう・・・」

愛歌が俯いていると、扉が開いて秀教達が入つて來た。

秀教

「おとなしくしてたか、愛歌嬢？」

愛歌は黙つて頷く。

信康

「ボスが金を持って帰つて來たら、この嬢ちゃんの役目は終わりな  
ワケだが・・・」

家吉

「どうしてかね、この娘？」

愛歌

「……」

愛歌はビクッとなつた。

愛歌

「（わ、私、もしかして殺されてしまつんでしょうか……）」

信康 「この嬢ちゃんには顔も見られてはいるし、普段なら始末するといつ

だが・・・」

愛歌

「ん、んん・・・」

愛歌は震えている。

秀教

「せつかくボスが好きにして良いって言つてくれた事だし、この娘をオレ達の好きにさせてもうひとつするか。」

愛歌

「ん、んん！？（な、何ですか！？）」

信康

「鵜飼先輩、アンタいつから年下好きになつたんですか？」

秀教

「変な風に言つたなよ。『イイジが靈家の令嬢だから』んだ。ただの小娘なら、ここまで興味は湧かないや。」

家吉

「セリヤセリヤですね。」

愛歌

「ん~!~」

秀教はズボンからナイフを取り出すと、愛歌に近づいて行く。

愛歌

「ん~ん~!~」

愛歌はジタバタともがいた。

秀教

「へへッ、覚悟しな愛歌嬢。」

秀教はナイフで、愛歌の服の左ゾーテを切る。

ビリッ!

愛歌

「ん~ん~!~」

秀教

「フフッ・・・まだまだお楽しみはこれからだ・・・」

愛歌

「んっ、んんん～っ……（イ、イヤア～……）」

愛歌は悲鳴を上げていた。

30分ほどして、翁がアジトに帰つて來た。

翁  
「帰つたぞ。」

翁は地下室に真つ直ぐ向かう。

翁  
「何じや、お楽しみ中じやつたのか。」

秀教  
「ボス、おかげさまで楽しませもらつてしますよ。」

秀教達は笑いながら言つ。

愛歌は服やスカートの所々に切れ目が入つていていた状態であった。

愛歌  
「ん、んんんう・・・」

愛歌は涙声になつてゐる。

翁

「身代金は頂いたし、後は愛歌嬢を始末するだけじゃな。」

愛歌

「ん、んん・・・・!（そ、そんな・・・・・）」

愛歌はジタバタともがく。

翁

「オマエ達、殺れ。」

信康

「チエツ、せつかくの上玉娘だったのによ・・・・」

秀教

「ボスの命令とあつちや、しじつがないな・・・・」

秀教達はナイフを取り出すと、愛歌に近づいて行く。

愛歌

「ん、んん・・・・（わ、私ここで死ぬの・・・? そんなのイヤです  
! やつとハヤテ君を好きになつたつて気づけたのに・・・・こんな所  
で終わりたくありません! ! 助けて、ハヤテ君・・・・! ）」

愛歌は泣きそつこなつている。

愛歌

「んんん~つ! ! ! (ハヤテ君~つ! ! ! )」

愛歌が必死に悲鳴を上げた、その時だった。

ハヤテ

「愛歌ちゃん……無事ですか～！？」

ハヤテの声が聞こえてきたのさ。

愛歌

「（ハヤテ君だわ……）」

翁

「綾崎ハヤテ……」のアジトを突き止めて来たか。

家吉

「丁度良い。とつ捕まえて愛歌嬢の前に引きすつて来てやる……

家吉は部屋を出て行く。

愛歌

「（ハヤテ君、危ない……）」

愛歌はハヤテの身を案じた。

しかししばりくわぬと、家吉の囁び声が聞こえてきた。

家吉

「グハア……」

信康

「お、おこびました、家吉ー。？」

信康は家吉の声が聞こえた方に反応し、部屋を出る。

数分後、信康が部屋に飛ばされて來た。

信康

「グオオ！！」

ドサッ！

秀教

「な、何なんだ一体！？」

秀教が驚いていると、疾風が部屋に入つて來た。

ハヤテ

「愛歌さん！-！」

愛歌

「ん、んん・・・（ハ、ハヤテ君・・・）」

翁

「フン、勇敢にもここを突き止めて來よつたか。じゃが・・・」

秀教はナイフを持つて愛歌に近づいてゐる。

秀教

「それ以上近づくなよ、小僧・・・近づいたら、この小娘の命は・・・」

ハヤテ

神速！

デヤン！

ガシツ！

ハヤテは秀教が愛歌に迫る前に、高速移動で彼女を救出した。

秀才

八  
二  
二

ハアッ！！

ハヤテは鉄拳で、秀教を殴り飛ばす。

ドゴホー！！

「秀教 うぐあーー！」

秀教は壁に激突し、氣絶した。

「な・・・な・・・」

ハヤテ

「後はあなただけですね。さあ、どうしますか？」

ハヤテは冷ややかに言つ。

翁

「う・・・ウオオオオオ！」

翁はナイフを取り出し、ハヤテに向かって行く。

ハヤテ

「愚かですね・・・」

ハヤテは向かって来る翁のナイフをかわし、翁の背に手刀を叩き込んだ。

ヒヨイツ！

ドゴオ！！

翁

「グオオ・・・」

翁は地面に倒れ込む。

ドサツ！

ハヤテ

「愛歌さん、大丈夫ですか？」

ハヤテは愛歌の口のガムテープをはがす。

ピリリー！

愛歌

「イタタ・・・ええ、平氣ですよ・・・」

ハヤテ

「今、ほどいてあげますから・・・」

ハヤテは愛歌の背後に回り、彼女の拘束を解いた。

その後ハヤテの通報を受けた警察が到着し、翁達4人は未成年者誘拐と殺人未遂の容疑で連行された。

ハヤテと愛歌は警察で簡単な事情聴取を受けた後、2人で一緒に帰つた。

勝ち虫公園

ハヤテと愛歌は、勝ち虫公園に来ていた。

愛歌は秀教達に服の所々を切られたため、途中で新しい服を購入しそれに着替えている。

ハヤテ

「災難でしたね、愛歌さん。」

愛歌

「ええ・・・危ないところでした。」

ハヤテ

「でも良かったです。愛歌さんにケガがなくて。」

愛歌

「ほえ！・・・心配してくれてありがとうございます・・・」

愛歌はたじろいでいる。

ハヤテ

「そうだ、愛歌さん。これを。」

ハヤテは紙袋を愛歌に差し出す。

愛歌

「これは？」

ハヤテ

「一日デートの時に渡し損ねた、愛歌さんへのプレゼントです。」

愛歌

「開けて良いですか？」

ハヤテ

「良いですよ。」

愛歌は紙袋を開ける。

そこには水色のカチューシャが入っていた。

愛歌

「わあ・・・キレイなカチューシャ・・・」

ハヤテ

「愛歌さん」に似合つと思つて買つて来たんですよ」

愛歌

「あ、ありがとうございます」わざとます・・・」

愛歌は赤面しながらカチューシャをつける。

愛歌

「ど、どうしてよ」

ハヤテ

「とても似合つてますよ」

ハヤテは微笑む。

愛歌はその笑顔に見惚れた。

愛歌

「あ、あの、ハヤテ君・・・」

ハヤテ

「はい、何ですか？」

愛歌

「私、一度誘拐犯から助けられてからハヤテ君の事が気になっていたんです。そして、1日デートでようやく確信が持てました。私はあなたを好きになつたんだと。だから、迷惑かもしれないけど聞いてください！私、霞愛歌は・・・綾崎ハヤテ君が、好きです！！」

愛歌は精一杯の思いでハヤテに告白した。

ハヤテと愛歌の間に沈黙が流れる。

ハヤテ

「・・・愛歌さん・・・」

愛歌

「は、はい！」

次の瞬間、ハヤテは愛歌を抱き締めた。

ガバッ・・・

愛歌

「ハ、ハヤテ君！？」

愛歌は赤面する。

ハヤテ

「ボクもあなたが好きです、愛歌さん。生徒会室で2人きりになつたあの日から、ボクはあなたの事が気になつていたんですよ。そして、1日デートでやつと自分の本心に気づけました。」

愛歌

「そ、それって・・・」

ハヤテ

「愛歌さん、ボクの彼女になつていただけますか?」

愛歌

「は、はいー喜んで・・・!!」

愛歌はハヤテに抱きつき、お互いにキスをした。

霞邸に帰つたハヤテと愛歌を待つていたのは、千桜達だった。

何と千桜、あの後ハヤテの後をつけて彼と愛歌の会話や光景をビデオに録画していたらしい。

ナギやマリア、静音達にそのビデオを見られる事になり、上映の間ハヤテと愛歌は常時赤面していた。

その後ハヤテと愛歌は、2年後めでたく結婚した。

2人はこれから、幸せな家庭を築いていく事だろう・・・

綾崎ハヤテと霞愛歌。

2人の未来に、幸あれ。

完

このお話は、原作『ハヤテの『じじべー』』13巻で千桜が咲夜のメイドとして登場した話の後という設定です。

理沙の性格が少しちがいますが、楽しんでいただけたら幸いです。

## 第07話・朝風理沙＆春風千桜編／書記と風紀委員は意外と仲良し

やあ、ご機嫌いかがかな？

私は朝風理沙。

花も恥じらう116歳だ。

え？

前に同じような始まり方を見た気がする？

・・・細かい事は気にするな。

今日私は、ある危機に瀕しているんだ。

え、何の危機かつて？

・・・貞操の危機に決まっているだろ？

私は今、目が5つあり、触手をウネウネと生やした異形の妖怪に追われているんだ。

なぜこうなったのかといつと、それは約1時間ほど前にさかのぼるんだ・・・

朝風理沙はいつものように、実家である朝風神社で掃き掃除をして

いた。

理沙  
「」

理沙は楽しそうに掃き掃除をしている。

すると、神社の従者達が慌てて走つて来た。

タタタ・・・

「理沙様〜〜！」

理沙  
「どうした？」

「例の妖怪がまた現れました〜〜！」

理沙  
「またか・・・」

理沙はため息をつく。

解説すると、理沙は神社の娘なのである。

つまりは巫女さんだ。

しかし、彼女には特殊な力などほとんどない。

せいぜいお祓いの類ができるぐらいだ。

だが、特殊能力がある者はいる。

鷺之宮の一族だ。

どうやら妖怪や魔物達は鷺之宮一族の巫女の生き血を飲むと寿命が延びるらしく、それでわざわざ除霊されに行く無謀な輩がいるワケである。

しかしどういうワケか、勘違いして朝風神社の方にやつて来る妖怪や魔物もいるのだ。

そんなワケで、登校途中や下校中にたびたび襲われている理沙などが、伊澄達の協力もあって少しばかり対抗できるようになったのである。

とはいって、さすがに今回のは大きすぎたようだ。

「理沙様、ここは私達に任せて逃げて下さい……」

理沙

「わ、わかった！任せる……」

理沙は従者達にその場を任せ、逃げ出した。

理沙

「よし、ここまでくれば大丈夫かな。」

数分ほど走った理沙は、後ろを振り返る。

すると、後ろに例の妖怪が現れた。

『シャ～！～』

理沙

「キヤアアアアアア～！」

理沙は悲鳴をあげる。

すかさず逃げ出した。

妖怪が後を追つて来る。

理沙

「従者達は瞬殺だったのか・・・ヤバいなあ・・・」

理沙がそんな事を思いながら走っていると、彼女の前に鷺之宮銀華が現れた。

理沙

「あなた確か、伊澄君の大おばあ様の・・・」

鷺之宮銀華

「銀華じや。さあ、ここはこのオババに任せとけ。ウチの車で鷺之宮邸に逃げると良い。すぐそこに車が停めてある。」

理沙  
「恩にきつます！」

理沙は鷺之宮家の車に乗り込み、鷺之宮邸へと向かった。

数10分後、理沙は鷺之宮邸に着いた。

ほどなく伊澄がやって来る。

鷺之宮伊澄

「理沙さん、また妖怪が出たそうですね。」

理沙

「やうなんだ。今さつき銀華さんに任せて逃げて來たところです。・・・

「

『シャアアアアアアアー！』

理沙

「・・・えー？」

理沙が振り返ると、そこには例の妖怪がいた。

理沙  
「キヤアアアー！な、何で・・・

理沙は驚いている。

すると、銀華が血だらけで飛んで来た。

銀華

「い、伊澄・・・」

伊澄

「大おばあ様！！大丈夫ですか！？」

伊澄は銀華に駆け寄る。

銀華

「スマヌ、伊澄・・・今回の相手は大きすぎる・・・年寄りには荷が重かつたわい・・・」

伊澄

「お母様、おおおばあ様の治療と結界を・・・」

鷺之宮初穂

「わかつたわ！」

初穂は理沙と銀華を結界で囲んだ。

パアアアアア・・・

続いて、銀華に治癒用のお札を貼る。

ペタ！

初穂

「これで2人はひとまず大丈夫ね・・・それじゃ、伊澄ちゃん！行

くわよ！！

伊澄

- 10 -

伊澄と初穂は攻撃用と防御用のお札を取り出すと、妖怪と戦い始めた。

妖怪は触手を伸ばして来る。

シコツ！

初穂「八葉六式・マンジの盾」

初穂はお札を円状に合体させ、盾にした。

触手が盾にぶち当たる。

ドーカー！

『シャギヤアアア！？』

初穗

「伊澄ちゃんには、負けられないわー！」

伊澄

「さすがお母様・・・私だつて！八葉六式・矢札の弾丸！！」

伊澄はお札をまるで矢のように鋭く変え、複数撃ち放った。

「ヂヂヂヂヂヂーーー！」

『シャギヤア・・・・』

妖怪がのけぞる。

初穂

「一気に畳みかけるわよ、伊澄ちゃんーーー！」

伊澄

「はい、お母様ーーー！」

伊澄と初穂は妖怪と さらりに激しい攻防戦を繰り広げる。

理沙

「ビデオ持つて来れば良かつたかなあ。」

理沙はのんきに観戦していた。

その時である。

シユル！

理沙

「え？」

理沙の足に何かが巻きついた。

理沙

「！」これって・・・触手！？」

そう、妖怪の触手である。

妖怪は伊澄・初穂と攻防戦を繰り広げつつも少しづつ触手で結界に穴を開け、理沙を襲つて来たのだ。

シユルシユルシユル・・・

理沙

「キヤ・・・ムグ！！」

理沙は悲鳴をあげようとしたが、触手に口を塞がれる。

その間も妖怪は触手を理沙に巻きつけ、彼女をグルグル巻きに縛り上げた。

少しずつ理沙を持ち上げる。

初穂

「理沙ちゃん！？」

伊澄

「しまった！！」

伊澄と初穂が気づいた時には、理沙は妖怪の口元まで持ち上げられていた。

理沙

「ん~、ん~！！」

理沙は声にならない悲鳴をあげジタバタと暴れるが、全く効果がない。

『アーン』

妖怪は口を大きく開けた。

理沙を食べるためだ。

理沙

「んん~つ！！」

理沙は首を左右に振り、涙を浮かべる。

妖怪が理沙を飲み込もうとした、まさにその時・・・

初穂

「ハ葉六式・金縛り！！」

初穂の術が、妖怪の動きを止めた。

ピキィイイー！

『シャ、シャギヤア・・・』

妖怪は身動きできない。

初穗

「今よ、伊澄ちゃんー！」

伊澄

「はい！！八葉六式・・・轟・・・撃破滅却斬り！！！」

伊澄はお札を刀状にして妖怪に突っ込み、そのまま体を斬り裂いた。

ズバツ  
！！

妖怪は大爆発し、碎け散る。

「八葉六式・レスキュー・カー・ペット！！」  
伊澄

伊澄は落ちる理沙をカーペット状にしたお札で受け止めた。

ボサツ！

そのままぬつくりと地面に降ろす。

トンツ！

「大丈夫ですか、里ちゃん。

理沙は泣き出し、伊澄に抱きついた。

伊澄はそんな理沙を抱き締め、母親のよつよつ頭を撫でる。

しばらくして、理沙はよつよつ泣き止んだ。

理沙

「ありがと、伊澄君……」

伊澄

「どういたしまして」

伊澄は微笑む。

理沙

「助けてもらつたんだし、何かお礼がしたいです……私にできる事なら何でも言つて下さい……！」

助けられたためか、敬語になる理沙。

伊澄

「そうですね……あ、理沙さんつてメイドとかご存知ですか？」

理沙

「メイド……ですか？まあ私は社交会に出てますし、マリアさんとも面識ありますから多少はわかりますが……それが何か？」

伊澄

「実は私、最近幼なじみが雇つたメイドさんからメイド魂とこうの

を教えてもらっていたのですが・・・

理沙

「巫女さんがメイド魂をですか？」

伊澄

「その、私・・・物覚えが悪い方なのでつまづく覚えられなくて・・・」

理沙

「（スルーされた！？今、思いつきリスルーされたよね私の言葉！！）ハア、それで私にあなたのメイドになつてほしいと・・・？」

伊澄

「そういう事です。あの・・・ダメですか？」

理沙

「い、いえ！あなたは私にとつて命の恩人ですし、喜んでやらせていただきます！！」

理沙は躊躇の顔のメイドになる事を決意した。

伊澄

「では、着替えてから行きましょうか。」「

理沙

「行くって、ビビです？」

伊澄

「私の幼なじみのやつてるメイド喫茶にですよ。理沙さんはそこ

でじょり～メイドのバイトをしてもらいます。」

理沙

「やつぱつやうなるんですね。」

その後理沙は一度朝風家に帰り白皇の制服に着替えた後、伊澄と共にメイド喫茶に向かった。

メイド喫茶『ひまわり』

伊澄と理沙は、メイド喫茶・ひまわりにやつて来た。

理沙

「伊澄君、じこが・・・？」

伊澄

「ええ、私の幼なじみの喫茶店ですよ。咲夜～！」

伊澄が叫ぶと、中からグレーのシートヘアをした女の子が出て来た。

愛沢咲夜

「おお、伊澄さん。今日は迷わず来れたんやね？」

伊澄

「今日は連れがいたから。あ、そうだわ咲夜。この娘が・・・」

咲夜

「初穂さんから話は聞いたる。朝風家の娘で、巫女さんなんやつてな。」

理沙

「どうも。朝風理沙です。」

咲夜

「ウチは愛沢咲夜や。それにしても・・・カワイイけど、無愛想な娘やなあ。」

理沙

「悪かつたですね、無愛想で・・・」

伊澄

「彼女、『』でメイドさんのバイトをやりに来たの。」

咲夜

「さよか。ほな、ちやつちやと中入るで。」

伊澄達3人は、店へと入る。

理沙

「『』、咲夜君の家が経営してるんですか？」

咲夜

「そやで。最初は『メイドカフェ・サクニヤン』いつ名前やつたんやけどな、看板がムカつくから『メイド喫茶・ひまわり』に変えてもうたんや。」

理沙

「やつなんですか・・・」

咲夜

「そひいや、自分学校はどうなも?」

理沙

「えと、白皇学院ですか?」

咲夜

「白皇学院・・・あれ? そひいやしないだ雇つたメイドさんも白皇  
学院生やて言つてたな・・・」

理沙

「同じ白皇学院生? (誰なんだろ、それつて・・・?)」

理沙は考える。

咲夜

「ほな、この部屋が更衣室やから! こじ着替えてな。ウチちらもモー<sup>1</sup>  
タールームにおるとかい。」

理沙

「はい。」

咲夜と伊澄はモータールームに向かつた。

理沙

「とりあえず、着替えよ・・・」

理沙は更衣室のドアをノックする。

ほどなく、一人のミニスカメイドが出て来た。

「いらっしゃいませ～ バイトですか～？って・・・え！？」

理沙

「・・・！」

理沙は一瞬硬直する。

なぜなら、そここいたのは・・・

理沙

「ち・・・ちは・・・ムグツ！～」

ガバッ！～

バタン！

理沙はミニスカメイドの手で口を塞がれ、更衣室に連れ込まれた。

理沙

「プハツ！ち、千桜・・・だよね・・・？」

春風千桜

「あ・・・そ・うだよ・・・」

そう・・・

ミニスカメイドの正体は、理沙と同じ白皇学院生の春風千桜だったのである。

理沙

「何してるんだ? こんな所で・・・」

千桜

「見ればわかるだろ? ・・・メイドのバイトだよ。」

理沙

「さつき咲夜君が言つてた『白皇学院生のメイド』つて・・・千桜の事だったのか・・・ってか何でバイトを?」

千桜

「元々は父さんの会社が倒産しそうになつたんで始めたバイトだつたんだが、結局融資してくれる人が見つかってな。人目につきにくいからつて事で、咲夜さんの専属メイドになつたんだ。」

理沙

「まさか堅いイメージのある書記の千桜の口からダジャレが聞けるとは思わなかつたよ。」

千桜

「失礼なヤツだな・・・そういう理沙の方こそ、何でメイド喫茶でバイトなんかを? 賽銭箱泥棒が出て神社の経営が赤字にでもなつたのか?」

理沙

「イヤ、そうでなくて・・・」

理沙

「イヤ、そうでなくて・・・」

千桜

「じゃあ神社が火事にでもなったのか？」

理沙

「それもちがうわあ！…」

千桜

「だつたら一体何なんだ…・・・」

理沙

「伊澄君に命の危機を救われたんだ…・・・そのお礼にだよ。」

千桜

「フーン…・・巫女の理沙らしい出会いだ。私とは随分出会い方がちがうんだな。」

理沙

「千桜はそんな出会いの方じやなかつたのか？」

千桜

「ああ…・・・単にゲーセンでヴァタリアン12と一緒にやつて意気投合しただけだ。」

理沙

「…・・いかにも千桜らしい出会いの方だな…・・・」

千桜

「じゃあ、早速メイドの指南をするとしよう。」

理沙

「お願いします。」

伊澄と咲夜は、モニターラームでメイド達の様子を観ていた。

伊澄

「相変わらず、ギクシャクしてるわね、他のメイドさん達・・・」

咲夜

「ホンマやな。これじゃせつかくのメイド服が活かされへんつちゅうねん。」

伊澄

「理沙さんは大丈夫かしら・・・」

咲夜

「ハルさんが直々に指南するんや、多少はいけるやろ。」

伊澄と咲夜は少なくともそう思っていた。

しかし数分後・・・

千桜・理沙

「お帰りなさいませ、ご主人様あ～

」

キヤルーン&キヤーパーン

咲夜

「ボフツー！」

伊澄

「ブホツー！」

千桜と理沙のあまりの息の合いように、咲夜と伊澄は飲んでいたコーヒーと紅茶を吹き出した。

千桜

「お帰りなさいませご主人様。今日は何になさいます？」

理沙

「コーヒー？紅茶？それとも私達のえ・が・お・」

咲夜・伊澄

「・・・」

咲夜

「あの2人息ピッタリやな。」

伊澄

「そうね。知り合いだったのかしさ。」

伊澄はともかく、理沙と千桜が同じ白皇学院生である事を咲夜が知る由もない。

2人は理沙と千桜の働き振りを微笑んで観ていた。

こつして朝風理沙は、青いミースカメイド『リン』として鶯之宮伊澄の専属メイドになつたのである。

余談だがその後、咲夜の誕生日パーティで理沙と千桜が愛歌に正体を見破られその事を弱点帳に書かれてしまつたのは言つまでもないだろ？・・・

朝風理沙＆春風千桜編・完

某料亭

「久しぶりですね、ソニアさん。」

「そうですね、ハヤテ君。」

ハヤテ

「では、お見合いを始めましょつか・・・」

ソニア

「ええ、そうですね・・・」

ハヤテとソニアは、お見合いを始めた。

なぜこの2人がお見合いを始めたのかといつと、その理由は5年前にさかのぼる・・・

5年前

綾崎ハヤテ、16歳。

三千院家で執事をしている少年だ。

彼は今日、ビデオを借りるためにワタルの店に来ていた。

レンタルビデオ・タチバナ

「ウイーン！」

ワタル

「いらっしゃいます。つて、ハヤテか。」

ハヤテ

「どうも、ワタル君。またDVD借りにきました。」

ワタル

「そういうや、こないだナギが大量に借りたDVDの中に、ヴァタリアン混ざってただろ？」

ハヤテ

「ええ、まあ。」

ワタル

「大丈夫だったのか？あの後。」

ハヤテ

「ええ、お嬢様やマリアさんじばらくしがみつかれましたが・・・」

「

ワタル

「あ～、やつぱりな。あのDVDを取り寄せた時にオレも内容を拝見したんだが、あまりに怖かったのかサキがじばらくしがみついてきたからなあ。女には刺激が強すぎるんだよな、あれ。」

「

ハヤテ  
「ですよね。」

ハヤテとワタルが話していると、ソニアが店に入つて來た。

ウイーン！

ソニア  
「こんにちは～。」

ハヤテ  
「あ、シスター。」

ワタル  
「久しぶりだな、シスター。」

ソニア  
「こんにちは、ワタル君。」

ソニアは嬉しそうにワタルに挨拶している。

そう・・・

ソニアはアレキサンマルク教会での戦いの日から、ワタルの事が好きになつたのだ。

ショタコンじゃないのか？とか、犯罪じゃないのか？などといつも問題は置いておく。

ソニア

「お皿洗いのDVDを探して来ますね~。」

ソニアは上機嫌でDVDを探しに行つた。

タタタ・・・

ワタル

「スターのヤツ上機嫌だな・・・何でだ?」

ハヤテ

「（君の事が好きだからですよワタル君・・・）やついえば、サキさんは?」

ワタル

「ああ、サキなら・・・」

ワタルがそこまで言つた時、サキが店に帰つて來た。

ウイーン!

貴島サキ

「若、ただ今戻りました~。」

ワタル

「おお、お帰り。」

ハヤテ

「サキさん、お邪魔します。」

サキ

「あら、ハヤテさん。いらっしゃいませ。」

ハヤテ

「サキさんビルに近かけてたんですか?」

サキ

「え、えっと・・・それは・・・」

ハヤテ

「え?まさかサキさん・・・」

ワタル

「ああ・・・サキはオレと婚約したんだ・・・」

ワタルも赤面しながら囁く。

ソニア

「(・・・え?)」

DVDを持って戻つて来たソニアは、足を止めてしまった。

ハヤテ

「いつそんな仲になつたんです?」

ワタル

「こないだだよ。オレ、伊澄に告白したんだがフラれちまつてな。夜通し泣いてたオレをサキが慰めてくれたんだ・・・」

サキ

「私、こないだベガスのカジノで美琴様と対決した日の夜気づいたんです。私は若の事が好きなんだと……」

ハヤテ

「それで、どちらから告白を？」

サキ

「わ、私からです……で、今日は婚約指輪のサイズを測りに……」

ハヤテ

「それはおめでとうござります！」

カシャン！

ハヤテ・ワタル・サキ

「？」

ハヤテ達が音のした方を見ると、ソニアが床に落ちたDVDを拾っていた。

ソニア

「ワ、ワタル君……今日はこれを借りていきますね……」

ワタル

「あ、ああ……」

ソニアは会計を済ませると、足早に店の入口に走つて行く。

タタタ・・・

ワタル

「どうしたんだ? シスター・・・」

ワタルは首をかしげる。

ハヤテ

「ハア・・・」

ハヤテはため息をついた。

サキがビデオ屋に戻った頃、ビデオ屋の前に怪しいベンツが止まっていた。

「またやるんスか、アニキ?」

「ああ・・・もうオレ達に手段は選べねえんだ。」

そう、この2人組は例の誘拐犯コンビである。

前にワタルを誘拐しようとしてサキを誘拐しソニアに倒されて逮捕され、こないだまた脱獄してきたのだが、まるつきり懲りずにまた誘拐をしようとしているようである。

「でもアニキ・・・前にオレ達このビデオ屋のガキを誘拐しようとしてメイドさん誘拐して失敗しちまったんじゃなかつたでした?」

「ああ・・・オレはあれから考えてみた。どうせ誘拐するんなら2人まとめての方が、身代金の額が増えるだろ?ってな!..」

「流石頭良いぜアーチー!頭の仲がハイパー・コンピューター並だ!!」  
「うううといつもまつたく進歩していいない。

「じゃあ早速行くぞ!..」

「はい!..」

2人組は車を出てビデオ屋に向かう。

ビデオ屋に入ろうとした2人は、ビデオ屋から出て来たソニアにぶつかった。

ドカッ!

「つおつ!..

ソニア  
「キャツ!..

「すみません、いきなりぶつかって・・・ん?」

ソニア

「いえ、私こそ前方不注意で・・・え?」

2人組とソニアは、お互いをジーッと見る。

ソニア

「あら？ あなた達は確か・・・」

「ヤベヒ・・・まさかこんな所であん時のシスターと会つとは・・・」

「

「どうします？ アニキ・・・」

「仕方ねえ！ 復讐も兼ねてこのシスターを誘拐だ！ ！」

「へイ！」

2人組は次の瞬間、ソニアの手を引っ張つた。

グイッ！

ソニア

「キャッ！ ！」

ソニアは車に乗せられる。

ソニア

「だ、誰かあ～！ ！」

ソニアは叫ぶ。

その声を聞いて、ハヤテとワタルがビデオ屋から出て来た。

ハヤテ

「チャイツー早く車出セーーー！」

「はい！！」

2人組は車を発進させる。

フオオオーン！

あひでーい體で舞は遙もかうて行つた

「若、どうがなれりたんですかー?」

サキがビデオ屋から出て来た。

ワタル

「…シスターか、前にオマエを誘拐した2人組にさらわれたんだよ！」

「た、大變！早く警察に連絡しないと…」

!

「ああ、そうだな。ハヤテ！アンタは2人組の車を・・・」

大変!!早く警察に連絡しないと!!!

ワタルがハヤテのいた方を向いた時、既にハヤテはいなかつた。

ワタル

「つて、もついねえ……」

サキ

「車追うの早いですねハヤテさん……」

サキはなぜか感心していた。

一方誘拐されたソニアは、車の後部座席に乗せられていた。

ソニアは手足をロープでグルグル巻きに縛られている。

ソニア

「あ、あの……あなた達……」

「何だ、シスター？ 言つておぐが泣き叫んだってムダだぞ？」

ソニア

「迷える子羊達よ……今すぐ私を解放して白首しなさい……」

「ああ？ 何言つてやがんだオマエ？」

ソニア

「ハヤテ君から話は聞いてます。あなた達は前に三千院さんを誘拐しようとして失敗した事があると。そして前にもワタル君を誘拐しようとしてサキさんを誘拐し私に倒された。2度も失敗しているとこうのに、どうしてまたこんな事をするのです？」

「フン、アンタにはわからねえよ！オレ達や金のためには手段を選んでられねえんだ！」

ソニア

「哀れですね・・・」

「何だと・・・？」

ソニア

「私もハヤテ君達と出会つまでは、三千院家への復讐しか考えていませんでした。でもそんな私だけ彼らと交流して変われたんですね！あなた達だつてきっと変われるハズ！今からでも遅くありません！ちゃんと罪を償つて・・・」

「つるせえんだよ、小娘がー！つなりや大人をバカにするとどうなるか体に教えてやるぜー！」

「おい弟よー！オマエやつぱり年下好みなのか？」

ソニア・シャフルナーズは19歳です。

つまりこの2人組より年下。

助手席に座っている弟の手がソニアに迫る。

ソニア

「あ・・・あ・・・」

ソニアの脳裏に、ハヤテの顔が浮かぶ。

ソニア

「ハ、ハヤテくん！…！」

ソニアが叫んだ、その時だつた。

ヒュオオオオオ…・

上空からの風が槍のように降り、ボンネットを貫いた。

ドスッ！・！

「ゲッ！…？」

車が急停車する。

次の瞬間、空から飛んで来たハヤテがボンネットに着地した。

ズドッ！・！

「ヒィイツ！…？」

ハヤテ

「その人をボクに…・返してくれます？」

「は、はい…・・・

2人組は震える。

ソニア

「・・・

その後、2人組は再び警察に逮捕され連行されて行った。

ソニア

「あ、ありがとうございますハヤテ君、助けていただいて・・・

ソニアはハヤテにお礼を言つ。

ハヤテ

「いえいえ。困つた時はお互い様ですから」

ハヤテは笑顔で微笑む。

ソニアはその笑顔に見惚れた。

ハヤテ

「じゃあまた今度。」

ハヤテはそう言つと、疾風の如くで帰つて行つた。

ソニア

「綾崎ハヤテ君・・・かあ・・・」

ソニアはしばらく頬を染めていた。

それから1週間後・・・

白皇学院

ハヤテはいつものように、白皇学院に登校して来た。

今日は珍しくナギの姿もある。

ガラツ！

ハヤテとナギが教室に入ると、何やら教室が騒がしかつた。

ナギ

「おい伊澄、何があったのか？やけに教室がザワついているんだが・  
・」

伊澄

「それはですね・・・」

瀬川泉

「あ、ハヤ太君ナギちゃんおはよー！」

花菱美希

「ハヤ太君、聞いた？何でもこのクラスに新しく転校生が来るんだ  
つて。」

ハヤテ

「転校生？」

朝風理沙

「間違いないよ。さつき雪路が職員室で話してゐたのを聞いたからな。ちなみに性別は女の子だそうだ。」

ハヤテ達が談笑していると、クラスの担任である桂雪路が教室に入つて来た。

ガラツ！

桂雪路

「みんな～、席に着きなさい～！～！」

ハヤテ達は慌ただしく着席する。

雪路

「出席を取る前に転校生を紹介します。入つて来て！」

「はあい。」

ガラツ！

ドアが開き、転校生が入つて来る。

ハヤテ・ナギ・ヒナギク・伊澄・ワタル

「ああ～！」

ハヤテ達5人は、その転校生に見覚えがあつた。

なぜなら、その人物は・・・

ソニア

「シチリアから編入生として転校して来た、ソニア・シャフルナーズです。よろしくお願ひします」

ソニアは挨拶した。

雪路

「シチリアから転校して来たソニア・シャフルナーズさんです。みんな仲良くしてあげてね。じゃあ、シャフルナーズさんの席はあそこね。」

ソニア

「はい。」

ソニアはハヤテの隣の席へと歩いて行き、席に着席した。

トッ！

ソニア

「これからよろしくね、ハヤテ君」

ハヤテ

「ハア……」

ヒナギク

「どうして……シスターが白皇に……」

誘拐犯から助けてくれたハヤテに一目惚れし、白皇学院に転校して来たソニア。

波乱は必至だ！？

そして昼休み

ハヤテ達は食堂で昼食を取つていた。

ハヤテの横にはソニアがいる。

ナギ

「ハヤテのヤツ、いつの間にシスターと仲良くなってしまったの……？」

ヒナギク

「ハヤテ君、彼女とはいつ仲良くなったの……？」

ナギやヒナギクの表情が何気に黒い。

ワタル

「確かにないだウチのビデオ屋にシスターが来て……サキと婚約した事をハヤテに話してたら急に外に出ちまつて……そしたら例の2人組がシスターを誘拐して……ハヤテが助けに行つて……んで、こうなつた。」

ナギ・ヒナギク

「……」

伊澄

「スゴいワンパターンですね……」

ソニア

「ハヤテ君、あ～んしてください」

ソニアは自分が作つて来たお弁当のおかずをハヤテに差し出した。

ハヤテ

「えええええ！」

ハヤテは自分の周りを見たが、やはり空気が重い。

まるで、『卑くやつなさ』と謂われて居るようだ。

仕方がないので、ハヤテは口を開けた。

すかさずソニアがおかずをハヤテの口に放り込む。

パクッ！

モグモグ・・・

ゴクン！

ソニア

「ど、どひですか？」

ハヤテ

「はい、おいしいです ソニアさんって料理上手なんですね。」

ソニア

「そ、そんな・・・いきなり名前で・・・」

ソニアは頬を染めた。

それにより怒ったナギ達がソニアに詰め寄る。

ナギ

「あ～も～！何なのだ、シスター！…さつきからハヤテにベタベタしあつて…！」

ヒナギク

「そ、そつよ！私だってまだこんなにした事ないのに…！」

ソニア

「そ、そんな！私、別にそんなつもりは…」

伊澄

「と、とにかく！シスターがどういう経緯でハヤテ様に惚れたのかはわかりましたが…！」

泉

「昨日今日惚れたばかりのソニアちゃんに、そう簡単にハヤ太君を渡すワケにはいかないよ…！」

ナギ達の空気が重い。

「相変わらず賑やかだな。」

突然の声にハヤテ達が振り向くと、理事長の葛葉キリカが立っていた。

葛葉キリ力

「「」のままでは埒がアカン。そういうワケで・・・「」の度ある企画をする事にした!」

ハヤテ・ナギ・伊澄・ワタル・ヒナギク・泉・美希・理沙・千桜・  
愛歌・ソニア

ある企画?」

キリ力

名づけて・・・第1回綾崎ハヤテ争奪・無差別武道大会だ!!!

ハヤテ・ナギ・伊澄・ワタル・ヒナギク・泉・美希・理沙・千桜・  
愛歌・ソニア

# 無差別武道大会！？

キリカ

さよう。綾崎ハヤテを賭けて、トーナメント戦をしようじゃないかという事だ。優勝者は綾崎ハヤテを好きな日に1日だけ独占でき、何でも言う事を聞いてもらう事ができる……どうのはどうだ？」「…………」

ハヤテ

「ちよつ、ボクに拒否権はないんですねかあ～！？」

キリ力

「無論、ない！おぬしは多数の人間に好意を持たれてある事を一度自覚すべきだ。」

八  
ヤ  
テ

「そんなあ～・・・」

愛歌

「それで、その武道大会とやらはいつにするんです？」

キリカ

「明後日、白皇学院の講堂にて執り行つ。もしかしたら学院外からも挑戦者が現れるやもしれんからな。」

ハヤテ

「ハアア・・・・」

ハヤテはため息をついた。

キリカ

「それではな。」

キリカは食堂から出て行く。

ソニアはしばらくハヤテの事について考え込んでいた。

明後日

ナギ達はハヤテ争奪無差別武道大会に出場するため、講堂へとやって來た。

最初に決まった出場者は、ナギ・ソニア・ヒナギク・泉・美希・理

沙・千桜・愛歌・伊澄。

今日になつて急遽出場を決めたのは、虎鉄・氷室・康太郎・ワタル・雪路・詩音。

学院外からの出場者は、咲夜・歩・謎の男。

ヒナギク

「ついにきたわね、この口が・・・」

ナギ

「絶対に優勝してやるぞ・・・」

ナギやヒナギクのようにハヤテとの仲を進展させるのが目的の者もいれば、美希や愛歌のように動画や弱点帳のネタにしようとしている者もいた。

ソニア

「それで、ハヤテ君は今どこに?」

ナギ達は辺りを見回す。

キリカ

「よく来たな、出場者よ! オマエ達が求める綾崎ハヤテは・・・こだ!」

声のした方にナギ達が振り向くと、そこにはキリカがいた。

横に、檻に閉じ込められたハヤテの姿もある。

しかもなぜか、ハヤテはウェディングドレスを着せられていた。

愛歌

「理事長・・・なぜ綾崎君がウェディングドレスを着せられているんですか？」

キリカ

「え？ だつて綾崎は景品だつて、景品なんだから趣向を凝らそうと思つてな。」

泉

「私の時と同じ理屈〜！？」

泉が叫んだが、キリカはその意味がわからなかつたのかスルーした。

ソニア

「後で泉さんに詳しく話を聞こいつ・・・」

ソニア（愛歌も）はそう思つた。

瀬川虎鉄

「綾崎・・・何てカワイらしい格好だ・・・」

虎鉄は1人興奮していたが、一方で康太郎やワタルもハヤテのドレス姿に見惚れてはいた。

氷室は興味がない様子だったが。

ナギ

「それで、トーナメント表はどうなつてるんです？」

キリカ

「よくぞ聞いた！出場者のトーナメント表は、こうだーー！」

キリカはトーナメント表がある方を指差した。

ソ瀬瀬三桂春霞愛？鷺佐東朝花桂西橘暮  
二川川千風沢？之伯富風菱ヒ沢里  
ア虎院雪愛？宮康ナワ  
泉鉄ナ路千歌咲？伊氷太理美ギ歩夕詩  
ギ桜夜？澄室郎沙希クル音

美希

「私、ヒナとのお・・・？」

咲夜

「誰なんやろ、ウチの対戦相手つて・・・」

キリカ

「ソニア君と詩音はシード選手だ。準決勝まで待つてもいいわ。」

ソニア

「フウ、準決勝まで待ちますか・・・」

キリカ

「それでは早速第1回戦をしてもらひ。瀬川泉ＶＳ瀬川虎鉄！！！」

ナギ

「兄妹対決か。どうなるか見物だな。」

こうして、第1回綾崎ハヤテ争奪・無差別武道大会は始まった。

キリカ

「それでは早速第1回戦をしてもらひ。瀬川泉ＶＳ瀬川虎鉄！！！」

ナギ

「兄妹対決か。どうなるか見物だな。」

泉

「行くよ、虎鉄君。」

虎鉄

「私の目的は綾崎とオーストラリアで式をあげる事。それを邪魔する者は、たとえ妹でも倒す！！！」

虎鉄は瀬川家にあつた剣を握り、泉に斬りかかった。

美希

「マズい・・・虎鉄のヤツ、本氣で泉を倒す気だ！」

泉

「それが虎鉄君の本音なの・・・なら、その性根叩き直さないとね。」

泉が左手を前に向けると、次の瞬間虎鉄の剣の上半分が吹き飛んだ。

「

アソブ！

「え  
・  
・  
・  
?」

美希

# 虎鉄の金か吹き飛んだ！？

理沙

ヒナギク

一 泉の左手に握られてゐるの……木刀……？』

泉

一瀬川家に代々伝わる妖木刀・・・村正だよ。虎鉄君がただハヤ太君と男友達になりたいなら、私は妹として応援したい。でも・・・度が過ぎてハヤ太君に迷惑をかけるようなら・・・私は虎鉄を許さない。」

泉は村正を握ると、虎鉄に斬りかかる。

ゴオツ！

「うわあああーー！」

泉は村正を振るい、虎鉄の剣を粉々に破壊した。

バキイ！！

虎鉄

「わあ、待て待て泉い！！」

泉

「待たない。容赦しない。」

泉は村正を振り下ろし、虎鉄を強打した。

ドゴオ！！

虎鉄は氣絶する。

泉

「しばらぐへ一人でメキシコにでも行つて来なさい。」

キリカ

「だ、第1回戦・・・勝者、瀬川泉・・・」

ヒナギク・千桜・愛歌

「こ・・・」

理沙・美希・ナギ

「怖すぎるとー！」

ソニア

「つていうより私・・・あの子と当たつたら勝てるかしら・・・」

ソニア達は泉の鬼神ぶりに恐怖していた。

キリカ

「第2回戦・・・三千院ナギVS桂雪路ーーー！」

ナギ

「桂先生かあ・・・調子狂うな。」

桂雪路

「私が優勝よーんでもって綾崎君にはー日中たかってタダ飯だあー！」

雪路もどりやら、ハヤテにたかる事が田的のようだ。

少しお酒臭い。

ヒナギク

「お姉ちゃん、一杯飲んで来たわね・・・」

ナギ

「大丈夫だよ、ヒナ。私はあんな飲兵衛に負ける気は・・・そりゃそ  
らないから。」

ナギの言葉通り、その後雪路は5分も経たずにナギに負けた。

キリカ

「第3回戦・・・春風千桜VS霞愛歌ーーー！」

愛歌

「私が優勝したら、綾崎君にたくさん話が聞けますわ。弱点帳のペ  
ージも増えますねえ。」

千桜

「やつはさせませんよ、愛歌さん・・・特殊メガネ装着!-!-」

千桜はMHEが開発した特殊メガネをかけた。

千桜

「メガネビーム!-!-」

千桜はメガネからビームを放つた。

ビツ!

愛歌

「キヤアツ!-!-?」

愛歌は間一髪避ける。

愛歌

「千桜さん、私を殺る気ですかあ!-!-?」

千桜

「ドンドン行きますよお!-!-!」

千桜と愛歌の攻防戦は33分も続き、最終的に体力切れで愛歌がギブアップした。

愛歌

「(後で覚えてなさい・・・)」

キリカ

「第4回戦・・・愛沢咲夜VS謎の男！！」

「ついに・・・ついにこの日がきまーしタ！！」

謎の男は羽織つていたローブを脱ぐ。

ギルバート・ケント

「ワタシが優勝した暁には～！綾崎ハヤテに三千院ナギが土下座するよう」に要求して三千院家の遺産を我が手に・・・」

咲夜

「オドレはいっぺん死んで来い～っ！～！」

パツカーン！

ギルバート

「オーノー！ワタシの出番これだけですカア～！？」

キラーン・・・

ギルバートは星となり、わずか5秒で咲夜が勝つた。

ワタル

「何しに来たんだ？あの外国人・・・」

ナギ

「さあ？バカやりにじゃない？」

キリカ

「第5回戦－鷺之宮伊澄ＶＳ佐伯氷室－！」

伊澄

「あなたがこの試合に出場するとはね。」

佐伯氷室

「フツ。ボクはどうしても勝たないといけないのだよ・・・ボクはお金が大好きだからね。」

ナギ

「ダメだこの人・・・」

ソニア

「少しも進歩してませんね。」

伊澄

「そういう人なら、尚更私が負けるワケにはいきませんね。」

氷室

「フフフ、ボクもバカじやがないからね・・・手っ取り早く優勝で

きる方法を取らせてもららうよ。ダークホースをここで討つ！－！」

氷室はバラを伊澄に向かつて数発放った。

シユツ！

伊澄

「甘いですね、氷室さんも・・・」

伊澄はお札を取り出す。

伊澄

「八葉六式・・・拡散・撃破滅却。」

伊澄はお札を数発放ち、氷室のバラを消し飛ばした。

バシュ、バシュ！

氷室

「クツ！-！」

伊澄は氷室に近づく。

スツ！

伊澄

「まだ・・・やりますか？」

氷室

「う・・・ギブアップだ・・・」

氷室はギブアップした。

キリカ

「勝者、鷺之宮伊澄！-！」

第6回戦は、朝風理沙VS東宮康太郎だ。

理沙

「なぜ東宮君、このトーナメントに参加したのかね？」

東宮康太郎

「綾崎は女顔だけど心が強い。アイツに鍛えてもらえれば、野々原に頼らずとも強くなれるって思つたんだ。そういう朝風は何でだ？花菱のように動画のネタにしたいとか？」

理沙

「私は美希や愛歌さんとはちがう。なぜか最近ハヤ太君の顔を見ると頬が火照るんだ。この気持ちの正体を確かめたい！」

康太郎

「なるほどな。だけど、女のアンタがボクに勝てるかな？」

そう言つて、康太郎は理沙に挑んだが・・・

やはり数十秒で理沙に敗北した。

ピクピク・・・

康太郎

「・・・」

ナギ

「私より体力ないだけはあるな。」

キリカ

「第7回戦！花菱美希VS桂ヒナギク！！」

ヒナギク

「さあ、勝負よ美希。」

美希

「あ、あのセヒナ・・・・・・」

ヒナギク

「何?」

美希

「私、棄権しても良いかしら・・・・・・」

ヒナギク

「何言つてゐの、美希? 勝負は勝負よ。甘えは許されないわ。」

美希

「ちよつ、待つてヒナ・・・・・・」

ヒナギク

「問答無用!-!-」

美希

「キヤー!-!-」

ヒナギクは正宗を振るい、美希を追い回す。

美希は40分も逃げ続け、結局体力切れで倒れた。

美希

「もう・・・・ダメ・・・・・」

バタリ!

ヒナギク

「だらしないわね、美希。」

泉

「ヒナちゃん・・・」

理沙

「容赦ないな・・・」

最後の第8回戦は、西沢歩と櫛ワタルだ。

西沢歩

「珍しいね、ワタル君がこんなのに出るなんて。」

ワタル

「ハヤテはオレの憧れだ。アイツに男氣を教えてもらつんだ。」

歩

「悪いけど、私は負けないよ。」

歩とワタルの戦いは、30分経つても続いた。

しかも、歩がワタルを圧倒している。

ワタル

「何だ、歩のこの気迫・・・こつものアイツじやねえ・・・」

歩

「言つたでしょ？私は負けない・・・つて。」

歩はワタルに突っ込むと、彼を一本背負いで投げ飛ばした。

ブンッ！！

ワタル

「うわあっーー！」

ドッ！！

ワタル

「う・・・」

ワタルは氣絶する。

キリカ

「勝者、西沢歩ーー！」

ナギ

「バカな・・・ワタルがハムスターに負けた・・・」

歩

「だからハムスターじゃないわよナギちゃんーー！」

1回戦～8回戦までが終わり、泉・ナギ・千桜・咲夜・伊澄・理沙・ヒナギク・歩の8人とシード選手であるソニア・詩音の10人が残った。

第09話・ソニア・シャフルナーズ編／シスターと執事の恋物語『中編』

キリカ

「それでは第9回戦！瀬川泉ＶＳ三千院ナギー！」

泉

「よろしくね、ナギちゃん！」

ナギ

「う・・・私、勝てるかなあ・・・」

ナギは震えている。

泉

「行くよ、ナギちゃん！－！」

泉は村正を握りナギに突っ込んだ。

ドンッ！

ナギ

「わああ！－！」

ナギは必死に避ける。

泉

「逃げてばかりじゃ私には勝てないよ？」

ナギ

「クツ、仕方ない・・・MHEで作つてもうつたこれを使おつ。」

ナギはGペンのような物を数個取り出した。

ナギ

「唸れ、私のGペン！..」

ナギはGペン型の武器を矢のように数発放つ。

シユツ！

だが、泉はそれを全て叩き落とした。

ドカカカカ！

ボトツ！

ナギ

「そ、そんな！」

泉

「今度は私の番だよ。」

泉はナギの背後に素早く回り込み、ナギの頭を木刀で叩く。

パソコン！

ナギ

「うー..」

ナギは床に倒れた。

ドサツ！

キリカ

「勝者、瀬川泉！！」

続く第110試合は、千桜が棄権し咲夜の不戦勝となつた。

次は第111試合、伊澄ＶＳ理沙だ。

理沙

「伊澄君は強い・・・なら、私も本氣でやるーー！」

理沙は朝風神社から持つて来たナギナタ薙刀を袋から取り出し、構える。

理沙

「行くぞ！伊澄君ーー！」

理沙は薙刀を振るい伊澄に突っ込んだ。

理沙

「ハアツーー！」

理沙は薙刀で伊澄を攻撃する。

だが、伊澄は軽快にそれを避けた。

理沙

「クツ、当たらないーー！」

伊澄

「今度は私の番ですよ。八葉六式・・・集束・撃破滅却！！」

伊澄はお札から光線を放つ。

ドンッ！！

理沙は薙刀を両手で持ち光線を防ごうとしたが、耐えきれず壁に吹き飛ばされた。

理沙

「キヤアアア！！」

ドゴオ！！

薙刀が折れた理沙は、床に沈んだ。

ドサツ・・・

咲夜

「つ、強い・・・」

ナギ

「これが伊澄の実力なのか・・・」

キリカ

「第12回戦！桂ヒナギクVS西沢歩！！」

ヒナギク

「歩・・・まさかあなたと戦う事になるとはね・・・」

歩

「ヒナさん・・・私は負けませんよ。」

ヒナギクと歩の戦いは、30分経つてもまだ終わらなかつた。

ヒナギクの剣術と歩の体術はほぼ互角で、両者一歩も譲らない戦いが続く。

45分経つた後、歩の一本背負いを耐えたヒナギクが歩を強打し、ヒナギクが勝利した。

キリカ

「さあ、次は準々決勝戦！瀬川泉ＶＳ愛沢咲夜！！鶯之宮伊澄ＶＳ桂ヒナギク！！同時試合、始め！！」

泉

「お手柔らかにね、咲夜ちゃん」

咲夜

「あ、ああ・・・」

泉と咲夜の戦いは20分続き、最終的に泉が勝利した。

泉

「ヒナちゃん、そつちほじょ？」

泉はヒナギクの方を見る。

ヒナギクと伊澄の戦いは、まだ終わってはいなかつた。

しかも、ヒナギクの方は伊澄に押され気味だ。

ヒナギク

—ケツ・・・私の一撃が全然効かない・・・

伊澄

その程度ですか？せいかぐの正宗が泣いてますよ

ヒナギクは正宗を振り上げ、伊澄に突っ込んだ。

伊澄

八葉六式・擊破滅却。

伊澄はお札から光線を放つ。

ゴッ！

ヒナギクは正宗を両手に持ち光線を防ぐとするが、正宗は壁に吹っ飛ばされる。

「キヤアアアアーー！」

ドーオー！！

ヒナギク

「う・・・」

ヒナギクは床に倒れ、気絶した。

正宗は真つ2つに折れている。

美希

「あのヒナが・・・負けた・・・」

準決勝への進出者は、ソニア・泉・伊澄・詩音となつた。

ちなみに、折れた正宗は後日鷺之宮家が修理する事になる。

キリカ

「ただ今から準決勝を始める…まずは、ソニア・シャフルナーズVS瀬川泉…」

泉

「よろしくね、ソニアちゃん」

笑顔の泉とは裏腹に、ソニアはビクビクしている。

ソニア

「（）の子は笑顔の裏に強さを秘めてる…・・・負けられない…！」

キリカ

「開始…！」

泉

「行くよおーーー！」

キリカの声と同時に、泉はソニアに突っ込んだ。

「んっーー！」

ソニア

「わわわーー！」

ソニアはトンファーを前に出し攻撃を防ぐ。

「カアーー！」

ソニアのトンファーには、ヒビが入っていた。

「ピシー！」

ソニア

「ヒッ・・・・！」

泉

「『んんんん』行くよおーーー！」

泉はソニアを攻撃する。

「カアーー！」

「キッーー！」

ソニアのトンファーの片方が、真つ2つに折れた。

ソニア

「ウソー?」

泉

「片方だけで、私の攻撃を防げるかな?」

泉は容赦なくソニアに突っ込む。

ソニア

「（この状況で泉さんに勝つには・・・これしかない！！）ハアッ  
！」

ソニアはトントンファーを泉めがけて投げた。

ブンッ！

泉

「自ら武器を捨てるなんて・・・血迷ったの？」

泉はトントンファーを叩き斬る。

ザンッ！！

その時、ソニアの姿が泉の視界から消えた。

泉

「あ、あれー？ソニアちゃんは？」

ソニア

「私はソニアですよー。」

泉は声のした方に振り向く。

すると、真後ろにソニアがいた。

ソニア

「スキあり、ですよ?」

泉

「し、しまつ・・・」

ガシツ!

ソニア

「ハアアアアアツー!」

ソニアは泉を一本背負いでブン投げる。

ブンツー! !

泉

「キヤアアアー! !」

泉は床に叩きつけられた。

ドシャツー! !

泉

「私の負けだね、ソニアちゃん」

準決勝第2試合は伊澄が詩音を圧倒的実力差で倒し、決勝戦へとマを進めた。

詩音

「キリカ様あ～！負けてしまいましたあ～！」

キリカ

「まあオマエがあの娘に勝てる可能性は五分五分だったからな。それでは早速決勝戦を始めよう。ソニア・シャフルナーズVS・・・鶯之宮伊澄！！」

伊澄

「ソニアさん・・・戦うなら最初から全力で来てください。でなければ・・・大ケガしますよ？ハ葉六式・・・滅却波！！」

伊澄は札を振り、波動を放った。

ドン！～

ソニア

「わわつ！～」

ソニアは慌てて予備のトンファーで防御する。

ガキイン！～

だが、トンファーにヒビが入っていた。

ピシ・・・

ソニア

え！？

伊澄

一 言、たバスですよ？最初から全力で来てくださいと

ソニア

「……」（強烈の意象）

「滅却・鎌鼬！」

伊澄は風の刃を放つた。

シユツ!!

「わっ！」

ソニアはトンファーで攻撃を防げりとする。

だが、トンファーは鎌鼬に破壊された。

ザンツ  
！  
！

ソニア

一  
ウソ！？

伊澄

「その程度ですか、あなたは・・・一気に決めさせてもらいますよ？八葉六式・・・集束・撃破滅却！！」

伊澄は強大な光線を放つ。

理沙

「私の時より数倍大きいぞ！！」

泉

「ソニアちゃん逃げて～！～！」

ソニアは意を決すると、トンファーを斜めに構えた。

千桜

「何やつてるんだ、彼女は？」

美希

「あんな事しても当たつてしまつわよ？」

ヒナギク

「・・・イヤ！」

伊澄の光線がソニアのトンファーに当たる。

その時、トンファーが光線を弾いた。

ガキイン！！

伊澄

「え！？」

伊澄は一瞬怯む。

ソニアはその一瞬のスキをつき、伊澄に突つ込み彼女を掴んだ。

ガシッ！

ソニア

「ハアアアアアツ！！」

ソニアは伊澄を一本背負いで投げ飛ばす。

ブンッ！！

伊澄は床に叩きつけられた。

ドシャツ！！

伊澄

「私の負けですね・・・」

美希

「一体何が起こったの？」

ヒナギク

「彼女はトンファーを斜めに構えたわ。 そうする事で、あの光線を受け流したのよ。」

キリカ

「さて、優勝はソニア君となつたワケだが・・・ソニア君、綾崎八

ヤテへの一日要求は何にするかね?」

ソニア

「えっと……それじゃあ……」

ソニアは照れながら言つ。

次の瞬間、彼女の発言にナギ達は絶叫した。

そして、今週の日曜日

ハヤテは遊園地で、ソニアを待つていた。

ハヤテ

「ソニアさん、遅いなあ……」

ソニア

「ハヤテ君、お待たせ!」

ハヤテがそう弦いていると、ソニアの声が聞こえてくる。

ハヤテ

「ソニアさん、待つてましたよ! では、行きましょうか。」

ソニア  
「ええ。」

ハヤテとソニアは歩き出す。

その2人を、ナギ達がジーッと見ていた。

ナギ

「シスターめ・・・あんなにハヤテに『アレアレと』・・・

ヒナギク

「ハヤテ君の腕掴んでるー私だつてあんなのした事ないのに・・・

「

歩  
「2人のデート邪魔します?」

咲夜

「あんなん、アンタから・・・」

千桜

「私達は負けたんですから、しょうがないでしょ?」

愛歌

「2人のデートを邪魔しようとしたら、理事長に言いますからね?」

愛歌に言われ、ナギ達はデートを邪魔する事を断念する。

伊澄

「皆さん、2人の尾行は私達がしておきますから・・・」

千桜

「自分達も遊園地を楽しんで来てはいががですか？」

美希

「そうね。大勢でゾロゾロ尾行するのも何だし・・・」

ヒナギク

「任せるわね、愛歌さん達。」

ヒナギク達は解散した。

咲夜

「さて、ウチらはハヤテらの尾行を続けるとするか・・・」

咲夜達はハヤテとソニアの尾行を開始した。

ソニア

「ハヤテ君、次はどこに行きます？」

ハヤテ

「そうですね・・・オバケ屋敷なんてどうですか？」

ソニア

「オバケ屋敷ですか・・・私、苦手なんですよね・・・」

ハヤテ

「大丈夫ですって。さあ、行きましょう！」

ソニア

「大丈夫ですって。さあ、行きましょう！」

「あ、ちょっと……」

ソニアはハヤテに引っ張られ、オバケ屋敷に入つて行く。

咲夜  
「ハヤテら、オバケ屋敷に入つて行きよつたな……」

千桜  
「まあ、大方展開の予想はつきますが……」

愛歌  
「追いますよ！」

咲夜達も、ハヤテ達を追つてオバケ屋敷に入つて行つた。

ハヤテとソニアは、オバケ屋敷内を進んでいた。

ソニアはハヤテにしがみついている。

ハヤテ

「ソニアさん……動きにくいんですけど……」

ソニア

「だ、だつて……怖いんですけど……」

ソニアが震えていると、オバケが飛び出して來た。

バツー！

『シャ～！』

ソニア

「キヤ～！！」

ソニアはハヤテに抱きつく。

ハヤテ

「ソニアさん、大丈夫です。ボクがあなたを守りますから。」

ソニア

「は、はい・・・」

ソニアは赤面する。

ハヤテ

「急ぎましょ～！」

ソニア

「あ・・・」

ハヤテはソニアの手を握り、走り出した。

ダッ！

千桜

「ソニアさんも怖がりですね～、あんな作り物を怖がるなんて・・・ねえ、咲夜さん。」

ハヤテとソニアを見ていた千桜は、咲夜の方を向く。

千桜

「咲夜さん？」

伊澄

「咲夜も愛歌さんも、気絶してしまってますね・・・」

千桜

「あらま・・・」

咲夜と愛歌は、気絶していた。

伊澄達がハヤテとソニアに追いつくと、2人はレストランに入ろうとしていた。

伊澄

「ハヤテ様達、今から食事をするみたいですね。」

咲夜

「ちょうどええやん、ウチもお腹減ってきたわ。」

千桜

「じゃあ、私達も食事にします？」

愛歌

「そうですね、できるだけ近くに座りましょう。」

ハヤテとソニアはレストランに入つて行く。

伊澄達も後を追つた。

ハヤテとソニアは、注文した料理を食べていた。

ソニア

「おいしいですね、この特製カレーライス！」

ハヤテ

「でしょうね、この特製カレーは絶品なんですよ。」

ソニア

「ハヤテ君が食べているスペゲッティもおいしそうだなあ・・・」

ハヤテ

「ソニアさんも食べたいんですか？」

ソニア

「え、ええ・・・」

ハヤテ

「じゃあ・・・アーン」

ソニア

「ア、アーン・・・」

ハヤテ

「えい 」

ハヤテはフォークでスペゲッティを巻くと、ソニアの口に入れた。

ヒヨイ！

パク！

モグモグ・・・

「ゴックン！」

ソニア

「おいしそうです！」

ハヤテ

「それは良かつたです 」

ハヤテとソニアはお互い微笑んでいる。

その光景を見た伊澄達は、赤面していた。

ハヤテ

「そろそろおあいぞしましようか？」

ソニア

「そうですね。 」

ハヤテとソニアは席を立つと、勘定を済ませ店の外に出る。

伊澄

「ハヤテ様達、外に出ましたね。」

千桜

「では、私達もそろそろ・・・」

「あの〜、[じひひひ]紫色の髪のお客様はおられますか?」

愛歌

「はい、紫色の髪は私ですが・・・何でしようが?」

「先程のお2方が、これをあなたにと。」

店員は愛歌に四角い小さな箱を渡した。

愛歌

「何でしよう、これ・・・」

レストランの外に出た愛歌は、箱を開けてみた。

パカッ!

愛歌

「キヤ〜!!!」

愛歌は悲鳴をあげ、気絶する。

バタッ!

千桜

「どうしたんですか、愛歌さん…？」

そういつて千桜が小箱の中をのぞいてみると、中から小さなカエルが飛び出してきた。

千桜

「ああ、これが原因ですか…？」

伊澄達は顔を見合わせ、苦笑いをした。

ようやく伊澄達はハヤテとソニアの居場所を突き止め、観覧車へとやつて来た。

咲夜

「ハヤテとソニアはまんば、ここにあるみたいやな。」

愛歌

「綾崎君め、よくもこの私に恥を…」

愛歌は拳を震わせてくる。

千桜

「愛歌さん、顔が怖いですよ…」

伊澄

「私達も乗りましょう。」

伊澄達は、観覧車に乗り込んだ。

ハヤテとソニアは、観覧車に乗っている。

ソニア

「ハヤテ君、今日は一人つき合つてくれてありがとうござります。」

ハヤテ

「いえいえ。ボクなんかで良ければ、いつでもつき合つますよ。」

ソニア

「ハヤテ君は本当に優しいんですね。三千院さん達が好意を抱くのもわかる気がします。」

ハヤテ

「そうですか?..」

ソニア

「ええ。ところでハヤテ君、こないだはありがとうございました。」

ハヤテ

「あ、あの2人組の件ですか。」

ソニア

「ええ。私、あの時は本当に怖かつたんです。もし何かされたらど

うじょりつて・・・「

ハヤテ

「本当にあの時は災難でしたよね。」

ソニア

「ハヤテ君には本当に感謝しています。これはそのお礼です。」

ソニアはハヤテの頬にキスをする。

チュッ

ハヤテ

「ソニアさん・・・」

ソニア

「また一緒に来ましょうね」

ハヤテとソニアはお互いに赤面した。

ハヤテとソニアは、観覧車から降りて来た。

ハヤテ

「今日は楽しかったですね。」

ソニア

「ええ。私も楽しかったです。」

ハヤテ

「それにしても、もう辺りが暗いですね。」

ソニア

「そうですね。」

ハヤテ

「夜道の一人歩きは危険なので、教会まで送りますよ。」

ソニア

「危険つて……私、19歳なんですけど……」

ハヤテ

「19歳でも女性である事に変わりありませんよ。」

ソニア

「そ、そうですね……じゃあ、お願ひしようかしら……」

ハヤテ

「はい」

ハヤテはソニアをアレキサンマル「教会まで送り届けた。

ソニア

「ええ、また明日ですね。」

ハヤテ

「じゃあ、また明日」

ハヤテは足早に帰つて行く。

ソーナはそんなハヤテを顔を赤くしながら見つめていた。

その夜、教会の女子寮にて

シントイ・ローラ『22』

「へへ～！ソーナちゃん今日、白壁の同級生とデートしてたんだ～。

ネイル・エヴァンズ『17』

「しかも相手は執事だつたつて話じやないですか？」

ソーナ

「え、ええ、まあ・・・」

ソーナは女子寮の部屋で、同志のシントイ・ローラやネイル・エヴァンズなどから質問責めに遭つていた。

ラナ・シュヴァング『15』

「それで？ソーナちゃんはその方に告白したんですか？」

ソーナ

「ほえ～？ま、まだだけど・・・」

ニア・シュヴァング『20』 ラナの姉

「え～、ダメじやない～ちゃんと告白しなきや～彼を好いてる人、

他にもたくさんいるんですね？」

ソニア

「え、ええ・・・」

ニア

「だったら早く告白しなさいよー！」

ラナ

「このままだとその方を他の子に取られちゃいますよ？」

ニア・ラナのショヴァング姉妹の言葉に、ソニアはあわてる。

ソニア

「も～、みんなからかわないでよ～！～」

シンディ

「ソニアちゃん、カワイイ」

シンディは、ソニアの赤面する顔を見て面白がっていた。

その夜中、ソニアは1人外に出でていた。

ソニア

「も～、みんなは・・・」

赤面するソニアの脳裏に、ハヤテの顔が浮かぶ。

ソニア

「私は誘拐犯から助けてくれたハヤテ君に一日惚れした・・・それは事実・・・でも今回は運良く2人でデートできたから良かつたけど、また2人きりになれる機会なんてあるかしら・・・ハア・・・」

「ため息ばかりついていると、幸せが逃げるぞ?」

ソニア

「?」

ソニアが振り向くと、後ろにリインが現れた。

ソニア

「し、神父さん!まだ成仏してなかつたんですか!?」

リイン・レジオスター

「失礼だが、私はもう亡靈ではない。伊澄君の力で新たな肉体を貰つてもらつたんだ。」

ソニア

「そ、うなんですか。」

リイン

「ところで、ソニア君。君はあの執事君の事が好きなんだつ?」

ソニア

「ええ、自覚はしてます。」

リイン

「ならば、自分の気持ちに正直になれ。彼にアタックすれば良いん

だ。  
「

ソニア

「ありがとうございます。私、頑張ってみます・・・」

リイン

「ウム、頑張れ少女ーー！」

ソニアはハヤテに気持ちを伝えようと決意した。

しかしながら2人きりになれるチャンスに恵まれなかつたのである。

そういうじでいる内にあつとこつ間に2年の年月が過ぎ、ハヤテ達は白皇学院を卒業した。

そして、時は流れる。

フォルテシア・ニース

「では、後は若い者達に任せましょ。」

クラウス

「そうですね。綾崎よ、三千院家の執事長として必ずこの見合いを成功させてくれたまえ。」

ハヤテ

「わかりました、クラウスさん。」

フォルテシア

「では、」ゆつくり。

クラウスとフォルテシアは、その場を後にした。

ソニア

「ハヤテ君、執事長になつたんですね。」

ソニアはそう言つと、ハヤテの隣に行く。

21歳になつたハヤテは、三千院家の執事長になつていた。

女顔なのは相変わらずだが、たくましい体型に育つている。

ハヤテ

「ソニアさんこそ、教会のシスター頭になつたそうじやないですか

？」

24歳になつたソニアは、アレキサンマルコ教会のシスター頭になつていた。

ショートボブだつた薄紫色の髪は腰のところまで伸び、雪路にも劣らないセクシーな体型。

5年の歳月は、ハヤテとソニアを肉体的にも精神的にも大人に成長させていた。

ハヤテ

「ボクは執事長として、新人執事等の育成に務めてるんですよ。クラウスさんにはし�ょっちゅう見合いを勧められてるんですけどね。」

ソニア

「私もシスター頭として、新人の育成に力を入れてますよ。フォルテシアとしては、早く嫁入りしてほしいみたいですねけどね。」

ハヤテ

「5年つて長いようであつといつ間ですよね。お嬢様やマリアさん達もほとんどが結婚してますし。」

ソニア

「そうですね。私の教会でも先輩方のほとんどが既に嫁入りしてますから。」

ハヤテ

「ソニアさん、少し外に出てみませんか？」

ソニア

「外にですか？」

ハヤテ

「ええ、新鮮な空気を吸いながらお話ししましょ'うよ。」

ソニア

「そうですね。」

ハヤテとソニアは、外に出た。

ハヤテ

「ソニアさん、10年で随分容姿が変わりましたよね。」

ソニア

「どうですか？」

ハヤテ

「ええ。髪も伸びてとてもカワイイになりましたよ。」

ソニア

「ほ、ほえー? あ、ありがとうございます。」

ハヤテの言葉に、ソニアは赤面した。

ソニア

「ハヤテ君も女顔なのは相変わらずですが、たくましい体型になりましたよね。」

ハヤテ

「毎日鍛えますから。」

ハヤテの笑顔に、ソニアは再び頬を染める。

ソニア

「(ああ・・・私やつぱり、ハヤテ君の事が好きなんだわ・・・)  
あ、あの、ハヤテ君・・・」

ハヤテ

「はい、何ですか?」

ソニア

「来週の日曜日、予定とかありますか？」

ハヤテ

「いえ、ありませんけど……？」

ソニア

「だつたら、来週の日曜日……私と2人きりで過ごしませんか？」

ハヤテ

「デートのお誘いですか？」

ソニア

「ほえ！？ ま、まあ似たようなものです……」

ハヤテ

「良いですよ ただし……」

ソニア

「何ですか？」

ハヤテ

「その日の夕食は、ボクが指定したレストランで、一緒に過ごす  
んですけど、よろしいですか？」

ソニア

「かまいませんよ。」

ハヤテ

「じゃあ、来週はよろしくお願ひしますね。」

ソニア

「はい！」

ハヤテとソニアは料亭に戻るとクラウス達に来週の事を説明し、お見合には終了した。

ハヤテ

「ではソニアさん、また来週。」

ソニア

「はい、よろしくお願ひしますね。」

ハヤテとクラウスは帰つて行く。

ソニア

「（やつたあ！ついにハヤテ君をデートに誘えたわ！来週こそハヤテ君に告白しなきや！！それにしてもハヤテ君、夕食はレストランでつて言つてましたけど、なぜなのでしょうか・・・・？）」

ソニアは物思いにふけりながら、フォルテシアと一緒に帰つて行った。

そんな彼女達を、怪しげに監視する3人組がいた。

「やつと見つけたぜ、シスター・ソニア・・・・」

「オレ達を地獄のどん底に突き落とした代償は高くつくぞ・・・・」

「覚悟しておけよ、小娘め・・・」

3人組は不敵に笑うと、暗闇の中に消えて行った。

果たしてこの3人組は何者なのか？

ソニアの命運は！？

そして、ハヤテとソニアの恋の行方は・・・？

第10話・ソニア・シャフルナーズ編「シスターと執事の恋物語』後編

ソニアがハヤテとパートの約束をしてから1週間後・・・

ソニアは教会から出ようとしていた。

彼女はハヤテとのパートのためにめかし込んでいた。

ソニア

「フウ・・・こんな格好で良いよね。早く行こう・・・」

ソニアが教会から出ようとするが、シンディ達が入つて来た。

シンディ

「ヤッホー、ソニアちゃんー!」

ニア

「久しぶりね。」

ソニア

「み、みんなーーーひつひつーーー?」

ラナ

「みんなちょうど仕事が休みで、空港で待ち合わせて教会に戻つて来たんです。」

ソニア

「そ、そななの・・・」

ネイル

「それよりソニアちゃん、そんなにめかし込んでどこ行くの？」

ソニア

「ハ、ハヤテ君と『テート』…………ないだお見合にして、その後『テート』の約束したの……」

ニア

「おお～～！」

ラナ

「ついにソニアさんも身を固める決意をしたんですね～～！」

ソニア

「え、ええまあ……じゃあ、私は出かけますので……」

ニア

「ちょい待ち～～！」

ピタッ！

ソニア

「な、何ですか？」

ニア

「あなたまさか、その格好で『テート』に行くつもり？」

ニアはソニアの服装を指摘する。

ソニアの服装は、水色のTシャツにピンクのロングスカートという

ものだつた。

「え、ええ・・・別に良いじゃない！多少控えめにした方が・・・」

ラナ

「ダメですよソニアさん！男を誘惑するならもう少しハメを外した方が良いですって！！」

ソニア

二  
三

「 」のままじや 埼があかなにわね。 」ひなつたりやるわよー ネイル、  
シントイー！ 」

二二

ネイル

# 一 お約束の( )・・・」

シティ

ソニアちゃんのお着替えタリイム

シンディ達4人が、一斉にソニアへと飛びかかる。

ババツ！！

ソニア

「み、みんな止め・・・キヤ～ツ！～！」

アレキサンマル「教会に、ソニアの悲鳴が響き渡った・・・

ハヤテはある遊園地の前で、ソニアの事を待っていた。

ハヤテ

「ソニアさん、遅いなあ・・・」

ハヤテは腕時計を見つめている。

すると、ソニアの声が聞こえてきた。

「ハヤテくん。」

ハヤテ

「あ、ソニアさんの声。」

ソニアが走つて来る。

タタタ・・・

ハヤテ

「ソニアさん、待つてましたよ・・・つて、えー！？」

ハヤテはソニアの格好を見て驚く。

ソニアは水色のノースリーブとピンクのミニスカートを着ていた。

髪型はポニーテールにしている。

ハヤテ

「ソニアさん、その格好は一体・・・？」

ソニア

「出かけようとしたら仲間のシスター達に捕まってしまって・・・こんな派手な格好に・・・」

ハヤテ

「ボクも似たようなものですよ。お嬢様とマコアさんに服を着せられて・・・」

ソニア

「お互い大変ですね。」

ハヤテ

「全くです。では、そろそろ中に入りましょうか？」

ソニア

「ハヤテ君、エスコートお願いしますね。」

ハヤテ

「はい」

ハヤテとソニアは、遊園地の中へと入つて行った。

ハヤテ

「あれ？おかしいなあ・・・」

ソニア

「どうしました？」

ハヤテ

「この遊園地は以前お嬢様達と来た事があるのですが、その時は混んでたんですよ。そもそもこの遊園地、普段はもっと混むハズなんですが・・・」

ソニア

「そういえばそうですね。なぜなのでしょう？」

ハヤテとソニアは、遊園地がガラガラな事に疑問を抱いている。

その答えは単純明快だった。

ソニアの仲間であるシスター達が、ハヤテとソニアのために遊園地を貸切にしたからである。

そのシスター達は、離れた所からハヤテとソニアを見ていた。

シンディ

「来た来た！ソニアちゃんとウワサの執事君よー！」

ラナ

「見た感じ、女顔の男の子ですねえ・・・」

ネイル

「で？あの2人を尾行するのよね？」

ニア

「当然！ソニアちゃんを幸せにできるかどうか確かめさせてもらひうわよ・・・」

シンディ・ニア・ラナ・ネイル

「フッフッフッ・・・」

シンディ達は不敵に笑っている。

ゾクツ！！

ハヤテ

「どうしました、ソニアさん？」

ソニア

「いえ・・・ちょっと寒気が・・・」

ハヤテ

「？」

ソニア

「まずどこに行きますか？」

ハヤテ

「オバケ屋敷は・・・ダメですか？」

ソニア

「怖いですが、ハヤテ君が一緒なら・・・」

ハヤテ

「じゃあ、行きますか？」

ソニア

「あ、はい！」

ハヤテはソニアの手を握り、オバケ屋敷へと向かう。

ネイル

「ソニアちゃん達、入ったわね。」

シンディ

「頼むわよ、シユヴァング姉妹！！」

ニア・ラナ

「はい」

ニアとラナの2人も、オバケ屋敷へと入つて行つた。

ただし、裏口から・・・

オバケ屋敷内部

ハヤテとソニアは、オバケ屋敷内部を進んでいた。

ソニアはハヤテにしがみついている。

ソニア

「ふ、雰囲気ありますよねハヤテ君・・・」

ハヤテ

「まあ そうですね・・・」

他愛ない会話をしながら進む2人。

すると、突然人魂が飛び出してきた。

実際には作り物なのであるが。

バーン！

ソニア

「キヤーッ！！」

ソニアはハヤテに抱きついた。

ハヤテ

「ソニアさん大丈夫ですか？」

ソニア

「ダ、ダメです・・・やっぱり私、オバケ屋敷は怖い・・・」

ソニアは震えている。

ハヤテ

「ソニアさん・・・大丈夫ですよ、ボクが必ずあなたを守りますか

ハヤテは満面の笑みを見せる。

ソニア

「は・・・はいです・・・」

ソニアはそれに赤面した。

ハヤテ

「ソニアさん、ボクの背中に。」

ソニア

「は、はい！」

ソニアはハヤテの背中に乗る。

ハヤテ

「しつかり掴まつてください・・・疾風の如く！・・・」

ドン！・

ハヤテは疾風の如くで、オバケ屋敷を一気に突き進んで行く。

タツタツタツ・・・

ソニア

「ハヤテ君・・・（ハヤテ君の背中、暖かいです・・・）」

ソニアはハヤテの背中の温もりを感じていた。

途中で幽霊やガイコツに出会わしたが、ハヤテは構わず突き進んだ。

それの中身が、シュヴァング姉妹だとも気づかずに・・・

ニア

「ウフフ、2人共ラブラブね～。」

ラナ

「そうですね、ニアお姉。」

ニアとラナは、2人のラブラブぶりを見てニヤケていた。

ソニア

「そろそろおなかが空いてきましたね・・・」

ハヤテ

「ですね、どこかで食べましょ～か。」

ソニア

「あ～あそこなんていりですか？」

ソニアが指差したのは、カレー屋である。

ハヤテ

「良いですね！」

ハヤテとソニアは、カレー屋へと入って行った。

ハヤテとソニアは、カレー屋にいた。

2人はそれぞれ違うカレーを食べている。

ソニアはカツカレー、ハヤテは野菜カレーだ。

「おいしいですね、ここのかレー！」

ソニア

ハヤテ  
「そうですね。」

ソニア

「ハヤテ君の食べるカレーもおいしそうだなあ・・・」

ハヤテ

「ソニアさんも食べます？」

ソニア

「は、はい！」

ハヤテ

「じゃあ、はい！」

ハヤテはカレーの入ったスプーンを差し出す。

スツ！

ソニア

「え？ これ、ハヤテ君が使ってるスプーンでは……」

ハヤテ

「そうですよ？ ボクが食べさせてあげますから」

ソニア

「ええ～！！（レ） これって俗に言う間接キスじゃないですか～！」

ハヤテ

「はい」

ハヤテはスプーンをソニアに近づける。

ソニア

「う・・・」

ソニアはしばらく黙っていたが、意を決して口を開けた。

ソニア

「あ、あ～ん・・・」

すかさずハヤテがカレーを口に入れる。

パクッ！

モグモグ・・・

ゴクン！

ハヤテ

「どうですか？」

ソニア

「おいしいです！野菜の甘みがカレーの辛さを引き立てて、とても美味だわ！」

ハヤテ

「そうですか、喜んでもらえて良かったです。」

ハヤテの笑顔に、ソニアはまたも頬を赤く染めた。

30分後、昼食を食べ終わったハヤテとソニアは会計を済ませ店を後にする。

その光景を、ネイルがしつかり見ていた。

ネイル

「フフッ、やっぱりラブね～。」

ネイルは会計を済ませると、シンディ達の元へと向かった。

ニア

「今日1日2人の行動を見てきたけど・・・」

ラナ

「結構良い感じでしたね。」

ネイル

「で、どうするシンディ。これで終わりにする?」

シンディ

「イヤ。まだ1つ残ってるわ。肝心な事がね・・・」

ネイル・ニア

「ま、まさかシンディ・・・」

シンディ

「ウフフ」

ハヤテとソニアは、遊園地内のベンチでくつろいでいた。

ハヤテ

「やついたら、ここってともおいしいアイスクリームがあるんで  
すよ。買つて来ましょうか?」

ソニア

「ありがとうございますー味はハヤテ君に任せますね。」

ハヤテ

「では、すぐそこなので。」

ハヤテは店へと走つて行く。

ソニアはベンチでくつろいでいる。

すると3分後、不良風の4人組が現れた。

もちろんこの4人組、中身はシンディイ達である。

「よお姉ちゃん、こんな所で1人何やってんだ？」

「ヒマならオレ達と遊ぼうぜ？」

「（良いんですかね、こんな事して……）」

シンディイ達はさうない男言葉を使つ。

ソニア

「申し訳ありませんが私、連れがいるので。ナンパするなら他の方にしていただけます？」

ソニアは軽くあしらおつしたが、シンディイ達がソニアに迫つて來た。

「まあまあそつつれない事言わずにさあ。」

ネイルがソニアの腕を掴む。

ガシツ！

ソニア

「ちょっと、止め……」

「那人から離れて下さ!。」

ソニア達が振り向くと、そこにはアイスを買って来たハヤテがいた。

「あんだあ、オマエは?」

「女のクセにオレ達に楯突くんじや・・・」

ハヤテ

「那人から離れる。でないとオマエ達の腕使い物にならなくなるぞ?」

ハヤテはドスの利いた声で話す。

さすがに腕を使い物にならなくなるのはヤバい。

シンディ達は少し悲鳴を上げてから逃げて行つた。

タタタタタ・・・

ハヤテ

「もう大丈夫ですよ、ソニアさん。」

ソニア

「ハヤテ君・・・

ソニアはハヤテに抱きつぐ。

ソニア

「今のハヤテ君少し怖かつたけど、頼もしかつたです・・・

ハヤテ

「ゴメンナサイ、ソニアさんを守るのに必死で・・・

ソニア

「良いんですよ、私は・・・

ハヤテとソニアはその後もデートを満喫した。

ソニア

「ハヤテ君、今日は一日ありがとうございます。」

ハヤテ

「ボクも楽しめましたよ。では、後はレストランで夜の食事ですね。これが住所です。」

ハヤテはソニアに紙を手渡す。

ハヤテ

「では、ボクはこれで。」

ハヤテは帰つて行く。

ソニア

「わいと・・・出て来なさい、シンディイ達ーー。」

ソニアが叫ぶと、近くの茂みからシンディイ達が出て来た。

ガサツ！

シンディイ

「アハハ、やっぱりバレてたか。」

ソニア

「バレるわよ。あんな片言の男言葉で気づかないとでも思つたの？  
後、今日一日私達を尾行してたでしょ。」

ネイル

「それもバレてたか。さすがはソニアちゃんね。」

ソニア

「全く。」

ラナ

「でもソニアさん、楽しんでもましたね。」

ニア

「あんなに楽しそうな顔したソニアちゃん初めてよ。で、この後は  
食事に行くんでしょ？」

ソニア

「ええ。シスター服でも着て行こうと想つてます。」

ネイル

「ダメよそんなの！ フォルテシアがちゃんとドレス買ってくれてるから、それ着て行きなさい！」

ソニア

「わかりましたよ・・・」

ソニアが返事したその時、彼女の携帯が鳴った。

ペペペペ、ペペペー！

ソニア

「あら、メール？・・・！」

メールを見たソニアは、顔が真っ青になつた。

ニア

「ど、どうしたのソニアちゃん？」

ソニア

「フォルテシアが・・・さらわれました・・・」

ネイル

「ええ！？」

シンディ達はソニアの携帯を見る。

そこには縛られたフォルテシアの写真を送付したメールがあつた。

『オマエの育ての親、フォルテシアを誘拐した。助けたければ北練馬の廃倉庫に1人で来い。』

ラナ

「これって脅迫じゃないですか！！」

ニア

「ダメよソニアちゃん、行っちゃー！」

ソニア

「そんな事言つても、フォルテシアは私の大切な家族です！放つておけません！みんなは一応教会に行つて下さい！！！」

ソニアはそう言つが早いが、駆け出して行つた。

アレキサンマルゴ教会

30分後、シンディー達は教会に戻つていた。

シンディー

「フォルテシアー！」

シンディー達はフォルテシアの部屋のドアを開け、中に入る。

するとそこには、フォルテシアがイスに座つて紅茶を飲んでいた。

ネイル

「フォルテシア！！」

ラナ

「誘拐されたんじゃないんですか！？」

フォルテシア

「私が誘拐？何言つてるんですか・・・今田は私、一度も外出してませんよ？」

ニア

「た、大変・・・」

シンディ

「ソニアちゃんが危ない！！」

北練馬廃倉庫

ソニアは北練馬の廃倉庫に来ていた。

ガラガラ・・・

ソニアはガレージを開け、中に入る。

ソニア

「フォルテシア！！」

そこにはフォルテシアがいた。

ソニアはフォルテシアに近づく。

ソニア

「フォルテシア？」

ソニアがフォルテシアの肩に触れると、フォルテシアの首が地面上に落ちた。

ボトッ！

ソニア

「キャアアア、フォルテシア！－ん？」

ソニアがのぞき込むと、そのフォルテシアは人形だった。

ソニア

「に、人形！？まさかこれは・・・」

震だと気づいたその瞬間、ソニアは背後から何者かに羽交い締めにされた。

ガシッ！

ソニア

「キャッ！－は、離して！－！」

ソニアは暴れる。

影はソニアの口をハンカチで塞いだ。

ガバッ！！

ソニア  
「うう……う、うう！！」

ソニアはジタバタともがいたが、やがて目がトロンとなつていく。

ソニア  
「うう……」

ソニアは氣を失い、倒れ込んだ。

ドサッ！

ソニア  
「ん・・・」

ソニアは「ううすう」と目を開ける。

ソニア

「し、縛られてるー？」

ソニアは体と手足をロープでグルグル巻きに縛られていた。

ソニア

「うへ、うへ……」

ソニアはジタバタともがいたが、ロープはビクともしない。

ソニア

「うう……ほどけない……」

ソニアが俯いていると、奥のドアが開いて3人組が入つて来た。

「おつと、目を覚ましたみたいだぜ。」

「久しぶりだな、シスター・ソニア。」

ソニア

「あなた達、誰です?」

「もう忘れたか、この覆面を!」

3人はそれ覆面を取り出した。

ソニア

「その覆面……あ、思い出しました! あなた達は確か……」

「フフフ……」

ソニア

「ティーズ・フロート……」

ズルツ！

3人はコケた。

「違うわ！オレ達はファミレスの飲み物か！！」

「デニーズ・フリートだ、デニーズ・フリート！…」

ソニア

「ああ・・・確かに私が雇ったテロリストの3人組でしたっけ？」

「ようやく思い出したか？」

ソニア

「それよりも、どうして偽装写真まで送りつけて私を誘い出したんです？」

「オレ達はあの日、三千院家の執事や令嬢共を暗殺すべく船を乗つ取つた。アツサリ倒されちまつたがな。」

「おかげでオレ達は刑務所暮らしだ。オレ達はオマエを恨んでる。」

「オレ達は脱獄した後、オマエを探していたのさ。恨みを晴らすために。フォルテシアの写真は偶然見つけた時に撮つて、合成での写真を作つた。」

ソニア

「あなた達も懲りない人達ですね。聞くところによると、白皇にも侵入してハヤテ君に倒されたらしいじゃないですか。」

「ああ・・・だからオレ達はあの執事にも恨みがある。オマエを人質にして、あの執事を呼び出して痛めつけてやるのさ。」

「さて、作戦会議だ。オマエ、余計な事は考えるなよ?」

3人組はそう言つと、ドアの奥へと消えて行つた。

ソニア

「ヤバいですね、これは・・・とにかく、ハヤテ君に連絡しないと・・・」

ソニアは辺りを見回す。

すると、ソニアのバッグがあつた。

ソニア

「あつた、私のバッグ!」

ソニアはゆっくりとバッグまで這つて行く。

ソニアは後ろ手でバッグから携帯電話を取り出した。

三千院家

ハヤテは自分の部屋で、レストランに行く準備をしてくる。

すると、突然ハヤテの携帯電話が鳴った。

「ハヤテ、ハヤテー。」

ハヤテ

「ソニアさんからだ・・・どうしたんです、ソニアさん？」

ソニア

「ハヤテ君・・・私今、かつてあなた達を狙ったテロリスト達に捕まってるんです・・・」

ハヤテ

「ええ・・・それでソニアさん、無事なんですか！？」

ソニア

「ええ、何とか・・・手足と体をロープで縛られてますけど・・・」

ハヤテ

「ソニアさん今、どうしているんです？」

ソニア

「北練馬の廃倉庫です。あ・・・」

ハヤテ

「ソニアさん、どうしました？」

ソニア

「キャラアアアーーー！」

ハヤテ

「ソ、ソニアさん…？」

「チツ、やはり執事に連絡してやがったか。」

「油断も隙もない小娘だぜ。」

ハヤテ

「オマエ達、あの時のテロリストだな？」

「よう、二千院家の執事。オマエに会ったのはあの劇以来だな。」

ハヤテ

「そんな事はどうでも良い。ソニアさんは無事なのか！？」

「ああ、無事さ。ちよつとい二千院家に連絡しようと思っていたが手間が省けた。この小娘を助けたければ、オマエ一人で北練馬の廃倉庫に来い。」

ハヤテ

「ソニアさんには手を出さな。」

「心しておくれよ、じゃあな。」

電話が切られる。

ピッ！

「セヒト…・・・マイツの口は塞いどくか。」

リーダーの男はガムテープを取り出すと、ソニアに近づいた。

ソニア

「...」

ビーッ！

ソニア

「や・・・ムウ～...！」

ペタッ！

ソニアは口にガムテープを貼られ、口を塞がれた。

ソニア

「ん～、ん～...！」

「さてと、後5分もすつや執事が...いやつて来るな。」

「アイツが来たら、オマエ共々ボロボロにしてやるぜ。」

ソニア

「んつ、んんつ...」

ソニアは震えている。

「しかし、この小娘なかなかスタイル良いよなあ。」

「あの執事が来るまでヒマだし、ちよつと楽ししませんか?」

ソニア

「！」

男の一人はナイフを取り出すと、ソニアに近づいていく。

ザツザツ・・・

ソニア

「んつ、んんつ・・・（イ、イヤ・・・助けて、ハヤテ君・・・）」

ソニアは泣きそうになる。

ソニア

「んんつ・・・（ハヤテ君つ・・・）」

ソニアが叫んだその時、ガレージがガラガラと開いた。

ガラガラ・・・

ハヤテ

「ソニアさん！」

「来たか、綾崎ハヤテ・・・」

ソニア

「んつ、んんつ・・・（ハ、ハヤテ君・・・）」

ソニアは瞳を潤ませている。

ハヤテ

「よくもソニアさんを泣かせましたね・・・許しませんよーーー」

ハヤテは疾風の如くで突っ込むと、あつといつ間に2人を倒した。

ド「コオー！」

「それ以上動くな、綾崎ハヤテ！動いたらこの小娘の命は・・・」

リーダー格の男はソニアにナイフを突きつけようとしたが、それよりも速くハヤテが突っ込んだ。

ザツ！

「え・・・」

ハヤテ

「遅いんだよーーー！」

ハヤテは回し蹴りでリーダー格の男を吹っ飛ばす。

ド「コオーー！」

男は壁に激突し、気絶した。

ハヤテ

「ソニアさん！大丈夫ですか？」

ハヤテはソニアに駆け寄り、彼女の口に貼られたガムテープをはがす。

ピリリ・・・

ソニア

「イタタ・・・ええ、大丈夫ですよ・・・」

ハヤテ

「今、ほどいてあげますから・・・」

ハヤテはソニアの背後に回ると、彼女の拘束を解いた。

その後ハヤテが呼んだ警察が到着し、デニーズ・フリートの3人組は誘拐と殺人未遂の容疑で連行されて行つた。

ハヤテとソニアは、レストランで食事をしていた。

ハヤテは執事服、ソニアは紫色のドレスを着ている。

ハヤテ

「今日は災難でしたね、ソニアさん。」

ソニア

「ええ、怖かったです。でも私、ハヤテ君が必ず助けに来てくれる信じました。」

ハヤテ

「ソニアさん、ボクはあの時必死でした。あなたを失いたくない一心だつたんです。これがその気持ちです。」

ハヤテは小さな箱をソニアに手渡す。

スッ！

ソニアが箱を開けると、中には指輪が入っていた。

ソニア

「これは・・・結婚指輪？」

ハヤテ

「そうです。ソニア・シャフルナーズさん・・・ボクと結婚していただけませんか？」

ソニア

「は、はいー喜んで・・・！」

ソニアはハヤテの方へ行くと、彼に抱きついた。

1ヶ月後、ハヤテとソニアはアレキサンマル「教会で結婚式を挙げた。

フォルテシアやシスター達に祝福されて。

電車の中で出会った2人。

この出会いは、運命だったのだろう。

綾崎ハヤテとソニア・シャフルナーズ・・・

2人の未来に、幸あれ。

ソニア・シャフルナーズ編・完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8974d/>

ハヤテのごとく！短編集～ヒロインは変わる、時のように～つながりを持たな

2010年10月9日00時50分発行